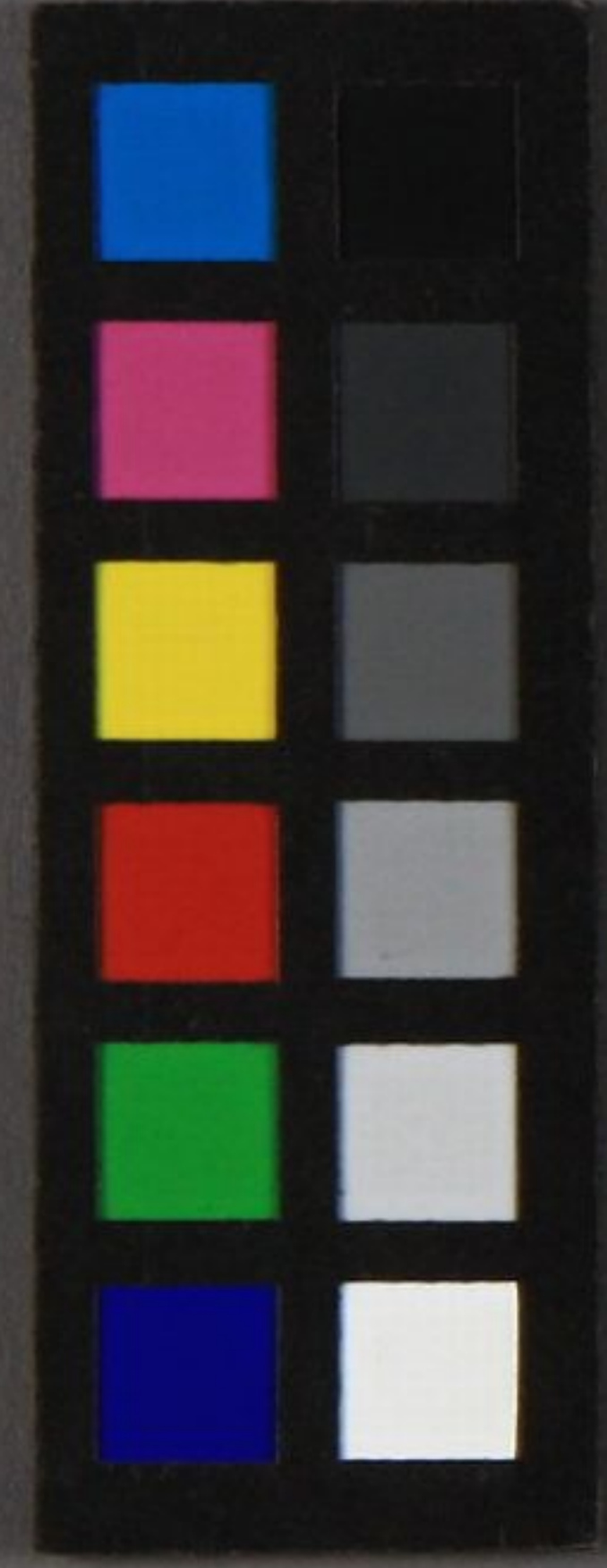


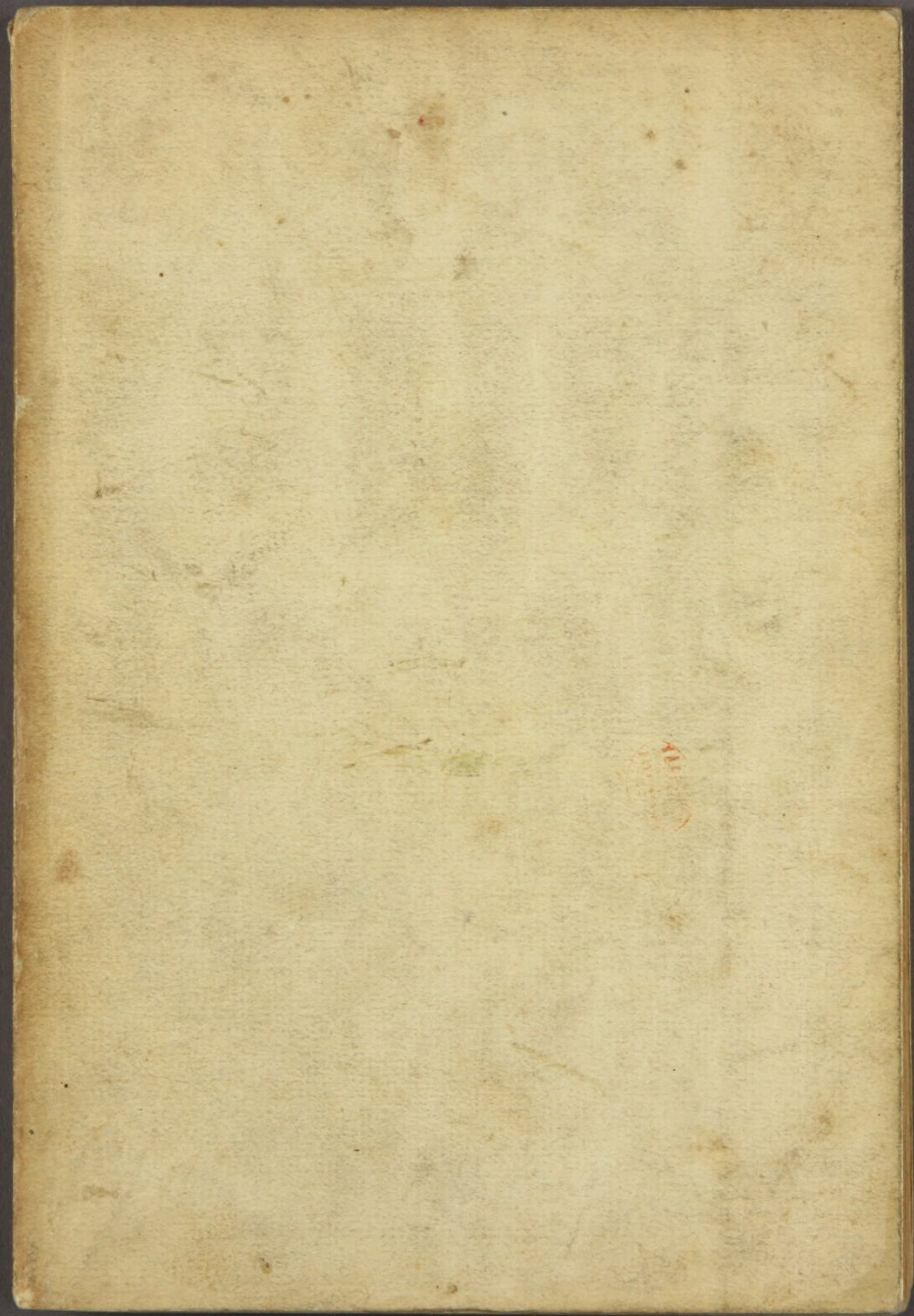
霧

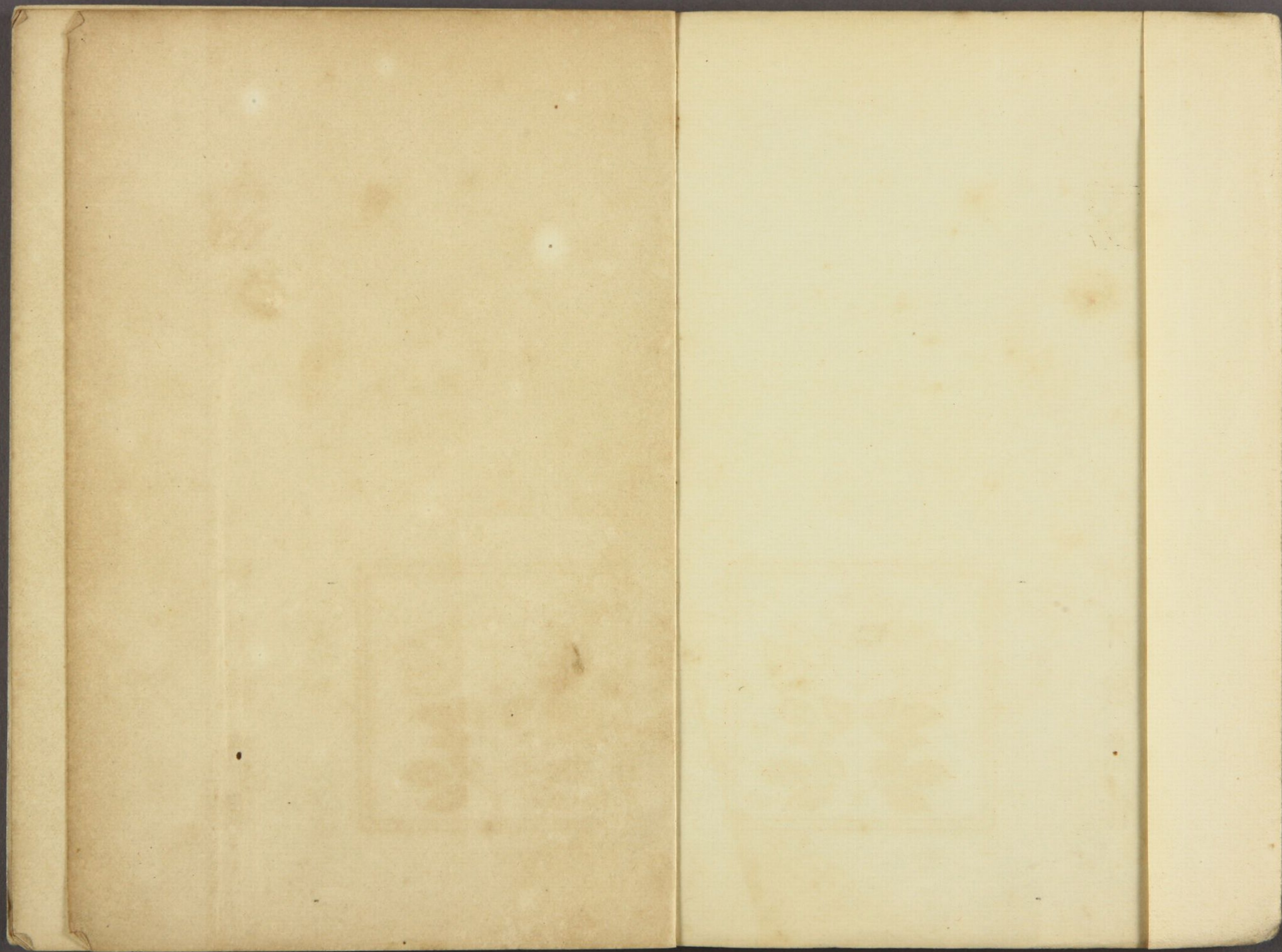
河井醉茗作

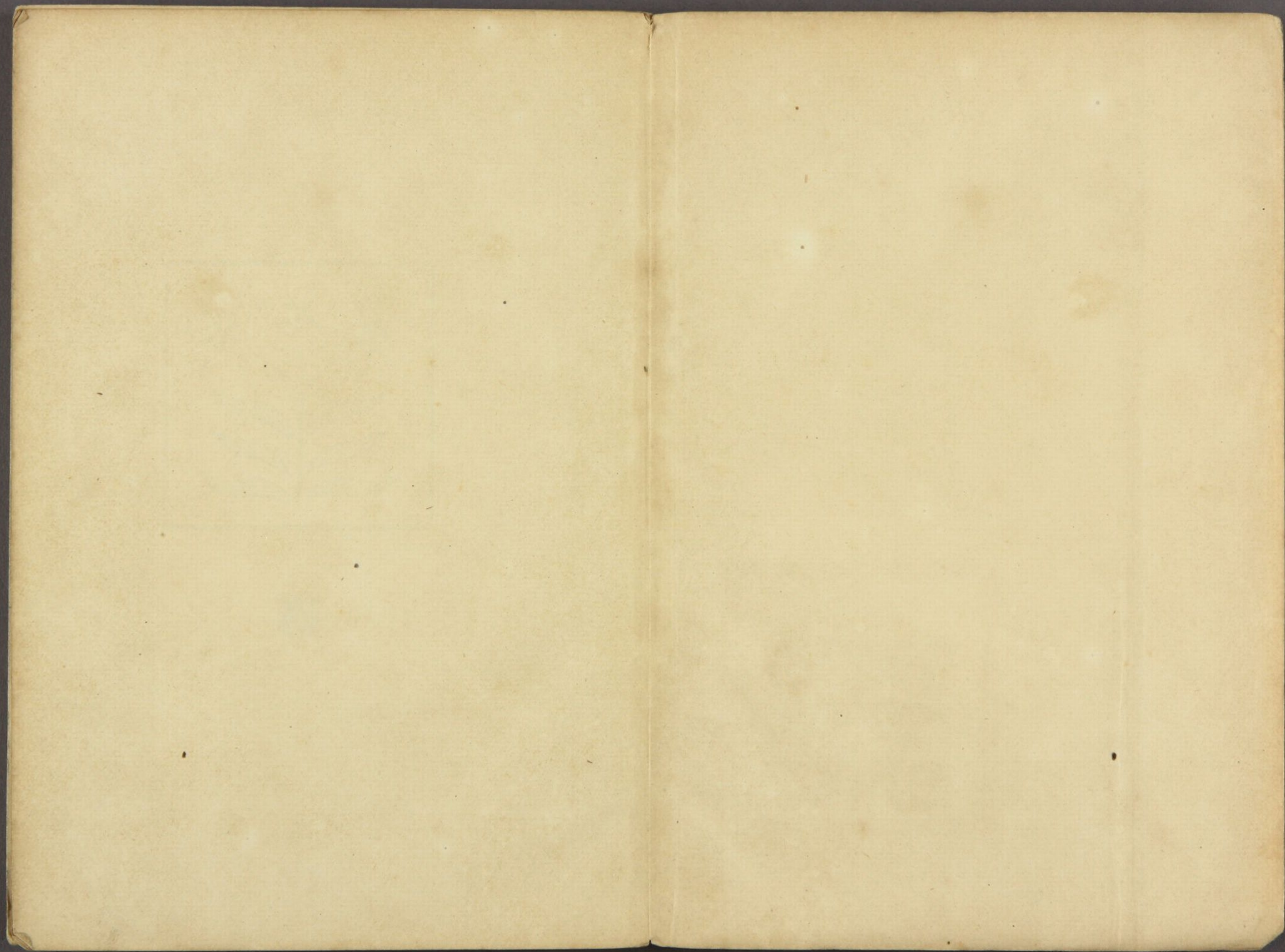


霧

河井醉茗作

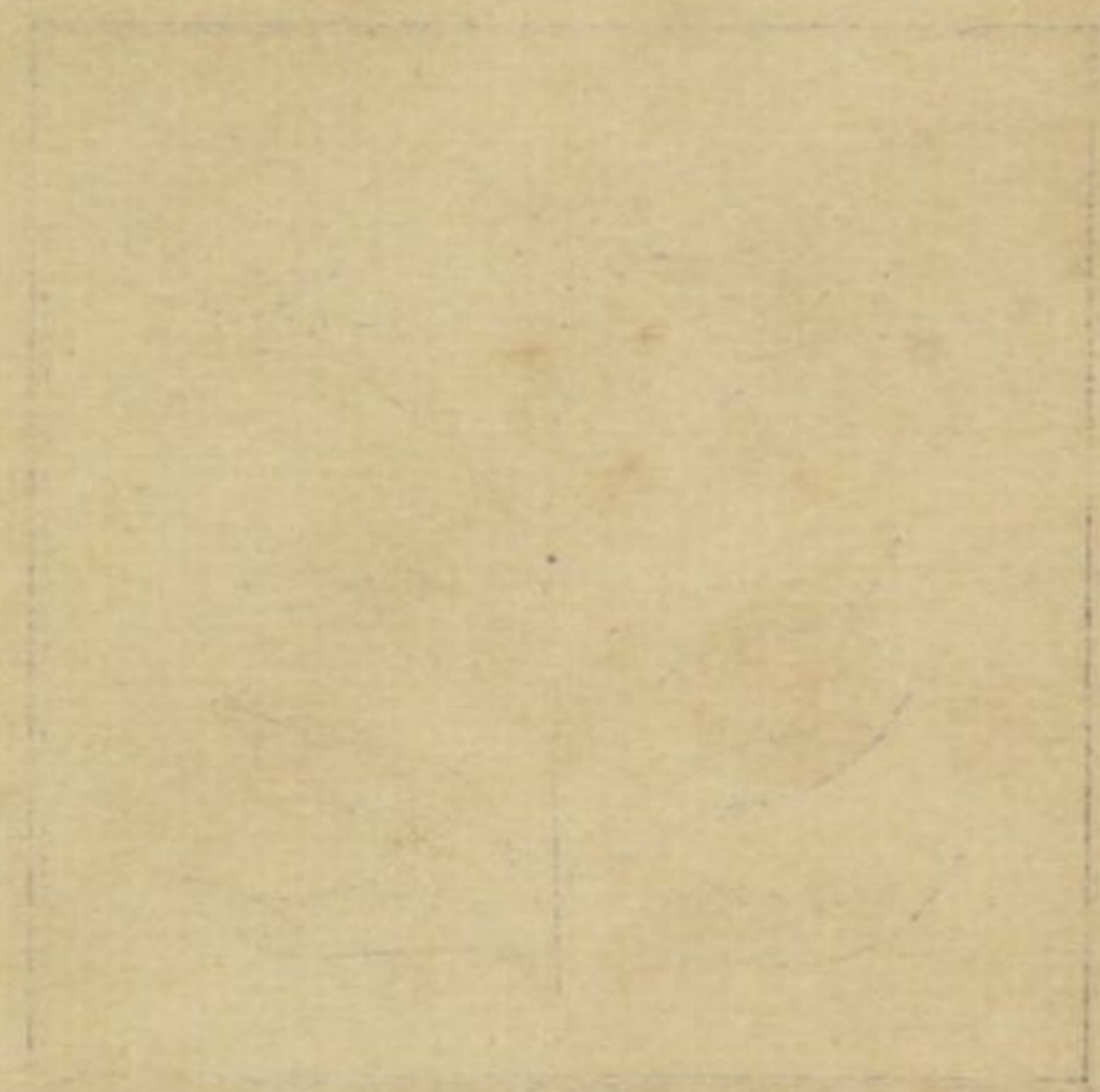








霧





目次

次目

蔷薇色の雨	一
聲せぬ家	三
雪	五
瘧	六
圓い顔と細い顔	八
暗い濱邊	一〇
禮拜	一三
ためらひ	一五
泣き聲	一七

次目

睡	雨	橋	曉	鳥	あ	泣	ト	轉	草	旗
					る	く	ン			
					る	女	ネ	宅		
眠				柱	朝		ル			
.....
六一	五九	五七	五五	五二	四九	四七	四五	四二	四〇	三九

次目

細	消	石	眺	屋	飯	魚	行	鳥	月	無
	ゆ			根	の	の			の	言
	る			傳	湯	血	け		痛	の
君	雲		望	ひ	氣				み	號
.....	令
三	三	三	三	三	二	二	二	二	二	一
七	六	四	二	〇	八	六	四	二	〇	九

次目

旅情	六三
お窓の姉さん	六七
曉鐘	六九
晩鐘	七一
光の下にて	七三
野	七四
松風	七六
翼の響	七七
揺れる花	七九
すれちがひ	八一
涙	八三

次目

脈搏	八五
窓のあかり	八七
舞臺	八九
都會の足音	九一
闇夜	九三
力のない日	九五
無意味	九七
きもの	九九
花辨	一〇三
信濃町の月夜	一〇六
山頭火	一〇九

次目

若	氣	一三一
臆	病	一三三
う	たし	一三五
場	末	一三七
道	ゆき	一三九
塵	烟	一四四
寒	い	一四六
日	消えゆく日記	一四八
秋	の湖畔	一五九
水	が無い	一七〇
海	邊の娘	一八〇

次目

非	人間	一一一
扉	の外	一一三
夢	の杜	一一五
表	まで来た人	一一六
つ	ぶて	一一八
戀	の詩	一二〇
空	虚	一二一
暮	れたばかり	一二二
肉	聲	一二六
毛	髪	一二七
鼓	の音	一二九

次目

旅

筈

一九三

表

紙

長原 止水

卷

頭

畫

岡田三郎助

霧

河井醉茗作

薔薇色の雨

薄あかい空、薔薇色の雨。

柳が青い。

土が柔い。

市街の橋がなまめく。

霧

鳥のよろこび、心のゆるび。

傘の雫が甘いやう。

濡れた女の袖が、紫の木蓮のやうに萎れてゐる、重くて地に落ちさう。

足袋を脱ぎたい、素足の心持になりたい。

衣服の上前の染が油のやうに泌む。

いつも顔が汚れてゐるやうに思はれるけれど洗はうともしなう。

聲せぬ家

母親は母親らしいことを考へて居やう。

姉は姉らしいことを思ふて居やう。

父は父らしい仕事をしてゐやう。

家の内は寂然として一人も物を言ふものがない、次の室、其次の室にも人は居るのだけれど、居るとも思はれぬやうな物足らぬ家。

曇つてゐるから時間が分らぬ、午後には相違ないけれど、

鈍い光線だ。
 垣根の外を途切れ〜に人が通る。
 遠くの方で人の話聲がする。
 何うしたら宜からうと、其ればかり繰返してゐるので、若
 い胸には何の解決もつかない。
 起つて次の室へ聞きにゆかうとも思はぬ。
 尊い刹那が斯うして過ぎて行く。
 世の中は一刻毎に變つて行く。
 何うしたら宜いか分らぬ。

雪 炎

土手の片蔭に雪が残つてゐる、雪の上を月が照らしてゐる。
 月にも色はない、雪にも色はない。
 月の光と、雪の息とが連れ合つて、冷たい陽炎が立つ。
 ちら〜と眩しい、白いやうな、青いやうな、紅いやうな
 織い炎が燃ゆる。
 北國に行くと、雪の炎の間から白い女の顔が見えるさう
 だ。

痙攣

熟睡よくねて居みた。

痛いたい、痛いたい、痛いたい。

誰たれか自分じぶんの脛ふくらはぎを噛かんだ、いや噛かんだのではない肉にくを撈ひり取るのだ。

猛獸まうじゅうだ、牙きはてやられたのだ、もう肉にくの一部ぶは取とられて了しまつた。

毒蛇どくたも居みる、纏まとひついてゐる、締しめつけて居みる、血ちを吸すふ、

骨ほねが碎くだける、毒どくは全身ぜんしんを胃いさうとしてゐる。

眼めが暗くらい、風かぜが吹ふいて居みる、石いしが飛とんで居みる。

女をんなの柔やはらかい手ても交まじつて居みる、撫なでられると堪たまらなくしびれる、放はなしてくれ、放はなしてくれ。

絞しぼるなら快こころよく血ちを絞しぼつてくれ、舊ふるい血ち、腐くまつた血ち、一瞬いっに絞しぼつてくれ。

あゝ持もつて行くのか、持もつて行くなら身からだごと持もつてゆけ
そこだけ肉にくを取とられると痛いたい、痛いたい。

圓い顔と細い顔

おきぬさんと、おはるさんとは毎朝、店頭を通つて裁縫に行く。

おきぬさんは屹度檐先をすれ／＼に、髪をあげたり、帯に觸つたり、袖を搔合したり、嬌態をつくりながら行く。眼が大きく、顔が圓く、美しい女ではない。

おはるさんは屹度遠く離れて、向ふ側の檐下を少し急歩に行く、傍目も觸らず、風呂敷包を大切さうに抱えて、身體

を堅くして歩いて居る。

おはるさんは顔の細い、脛脚の長い、痩せた女だ。

おきぬさんのことを言つて、私に那掄ふ人はあるが、おはるさんのことを言つた人はない。

廣い道幅の中央を通つて行く女は幾何もあらう。

暗い濱邊

ふたりは黙し合せて、或る夕方、同じ時刻に家を忍んで出た。濱邊を歩いた、ふたりの手を固く握り合つて。星が能く見える、暗い渚、海は動いて居る、漁火が揺れてゐる。

女は野に育つて、餘り海邊を歩いたことが無い。

「何故斯んなに暗いのでせう、私、海が恐い」

「斯んな静かな晩に何が恐いことがあるものか」

「波がそこまで来てゐるぢやありませんか」

「来て居たつて何ともない」

「私、何だか凄いやうに思ひますわ」

手を放して、又握つた。冷たくもなければ暖かくもない海の風が吹く。

女は途切／＼に思ひ出しては語る。

ざぶり／＼と這ふやうな波の音。

微かに燈臺の火が青い。

「何處まで行けるのでせう」

「何處まで、……併し歸らう」

無言で引返す。

引上られた船の傍で立止まつた。

『まだ恐いのですか』

『ハア何だか夜、出たことがないし、それに海があると思

ふと恐くつて』

又歩き出した。

兩個は何時の間にか明るい市街に出て了つた。

禮拜

私の役だから神燈明を上げた。

神棚の前に端座して、合掌しながら首を垂れた。

『一、二、三、四、五、六、七、八、九、十』

まだ餘り早い。

『心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神やま………も

………ら………む………菅原道實』

まだ少し早からう。

『京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三百三十三體あるといな、京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三百三十三體あるといな、京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三百三十三體あるといな』

もうよからう、バチ／＼と手を拍つて首を擧げた。

起つて此方へ來ると、今夜は感心に能く拜みました、何時も屹度然うするのですよと老婆さんが言つた。

ためらひ

若い男と、若い女の子が四五人賑やかに話してゐた。

誰か障子を開けた、冷たい風が來て、ふツと火が消えた。

あらツと誰やらが叫ぶ。

危いと座つたまゝの聲。

早く燈を點けなさいよと幼い聲。

マッチが有つた筈だがと其邊をかき探す、柔かい手が引込む。

ほくくと艶めいた笑ひ聲。

室に籠つた女の香、衣摺れの音と微かな息、女と女とが衝突つて笑ふ。

男の胸は轟いた、暗の中で形の無いものが抑へつける、つき放す、そののかす、ためらふ、無言。

女は暫時も黙つてゐない、物を言ふ、恐れる、動く、避ける、笑ふ。

バツと燈が点いた。

泣き聲

夕方の喧騒しさ。

何處かで女の子が泣いてゐる。

吾家の子らしい。

否、泣聲が異ふ、他家の子らしい。

未だ泣いてゐる。

やつばし、吾家の子か知ら。

誰か見に出てやれば可いのに、何をまごごしてゐるだら

う。
 電車が響く、豆腐屋の喇叭が鳴る。
 自分は其處どころでない、次から次とものを書いてゐる、
 少し昏くなつて來た。
 あ、また泣出した。
 何だ、他家の子か。

無言の號令

一小隊ほどの兵士が市中を行軍してゐる。
 美しい女とすれちがつた。
 女は一人だ。
 列にあるだけの兵士の眼は皆、女に向つた。
 女は同じ服、同じ銃、同じ背囊、同じ歩き方、同じ顔の男
 を見たばかりだ。

月の痛み

つきが痛む、光を失うた月の亡骸は赤銅色をして氣絶した。
 滅びてしまふやうでもあり、生きかへるやうでもあり、萎
 えはてた月の面は苦痛にあへぎ、絶望にうめく。
 夜の力はゆるんでゆく。
 鳥は埒から落ち、人は地に墮く、葉は黒い息を吐き大地は
 静かに沈んでゆく。
 まだ月が痛む。

たよらない色よ、心細い姿よ、生きる勢ひはまるで失せた
 地平に落ちるやうにも見えない、われ／＼に近づくやうに
 も思えない、遠ざかるのだ、恐れ／＼遠ざかるのだ。

鳥

捉えて居ると思つて安心してゐると、逃出しさうにする。
 そんなに逃たければ、自由な空へ逃げて行くが好い。
 捉えて居た處で私の生命に價値がつくでもない。
 逃たものだと思つて居ると、いつのまにか胸の巢に温まつ
 てゐる。
 いつ歸つて來たのか。
 鳥よ、ち前が居ると胸の巢が温かい。

けれども私は鳥を温める爲にばかりは生きてゐられないの
 だ。
 忘れることもあらう。
 冷たい血が巢に注ぐこともあらう。
 さうすると又逃出すだらう。

行け

此處には汝等より少し姿の違つたものが歩いて居るぞ。
分るまい。

危険いよ、危険いよ。

物を言ふと火がつくよ。

近づくな。

行け、行け、さつさと行け。

生きる場所が異ふ。

私の顔には何も表はれないけれど、

汝等が居ないと表はれるのだ。

あゝ表はしてみたい。

行け、行け、さつさと行け。

皆行たあとで、

八重の花弁をくづして、

私を表はしてみやう。

魚の血

腥なまぐさ。
腥なまぐさ。

生いきた魚さかなと、乾かわいた魚さかなの臭におひ。

臟腑はらわたが腐くさる。

大おほきな魚さかなの頭あたまを切きつて、二ふたり人りして重おもさうに擔かついて來くる。

赤あかい血ちが土つちの上うへに滴したつてゆく。

肪脂あぶらが光ひかりに溶と解ろける。

骨ほねが見みえて居ゐる。

海うみの汐しほが血ちになつて、

魚さかなの頭あたまから落おちて居ゐる。

土つちが吸すふ。

日ひが吸すふ。

人ひとが吸すふ。

飯の湯氣

ほかくと暖い。

夏の花がふくらむ日だ。

太陽が座睡つてゐる。

生が倦む。

火氣に蒸されるやうな厨 肥つた女が釜から飯をうつして
ゐる。

白い湯氣が竈の前に靡く。

焚きたての飯の匂ひ。

むつとする。

女に飢ゑたものは何んな女を見ても美しう。

飢ゑたものは、春の正午の飯の湯氣にさへ食指動く。

食欲が激むのは生に疲れたのだ。

何も食へずに眠りたい。

屋根傳ひ

舊い家から逃出さうと思ふけれど、締りが厳しくて逃出す
ことがむづかしい。

釘は腐蝕つてゐるけれど扉は重い。

窓はあまりに高い。

壁と壁との間から天が覗いてゐる。

外へ出よ、外へ出よ、外は明るい、広い。

生きて居るものが龕の裡にかしこまつてるのも苦痛だが、

出るのも苦痛だ。

舊い家には綱がある。

出るところを見つけれたら引戻される、繫がれる。

知らないうちにと、二階から屋根傳ひに脱れる。

宵暗の天に星が燦めいてゐる。

ほつと空に向つて息吐いた時の、自由な、ひろびろした心

持はなかつた。

其心持はそれなり屋根傳ひに逃て行て了つて、

やはり私は次の舊い家に繫がれてゐる。

眺望

女をんながすねた。

面白おもしろい。

唇くちびるがゆがんでる。

通り雲とほぐもに日の面おもてが曇くもつた。

微塵みじんも覺知さとつた氣けぶりを見みせず、曇くもつた景色けしきを眺ながめてゐると。

まじくと心こころの持もつてゆき場所はしよに困こまつて居ゐる。

只眺ただながめて居ゐれば、彼かれの心こころは彼かれに返かへつて行く。

眺ながめてゐるうちに目ひがあたつてくる。

何なんのこともなし。

石

野は平かに大和國原を秋風が吹きわたる。

稲の穂はそよ／＼と靡いてゐる。

突元として何處から投げられたとも知れぬ大石が、半は土に埋れて、稲穂の間に現れて居る。

大和は石が多い。

山から流れて來た岩でもない、天から落ちた星の屑でもない。

50

太古から野に在るのだ。

ひろ／＼とした野中の石に秋風が吹く。

消ゆる雲

小さな雲が浮いて居る。

凝視して居るとだんく、だんく小さく、薄くなつて来る
眼を放したらひろい大空に見失ふであらう。

遂にうすくくなくなつて消えて了つた。

又次に小さな雲を見つけて、凝視して居ると、それも頓て消えて了ふ。

消えた雲は滅多に現れないと思つた。

細君

獨身の男は得意氣に語つた。

彼處の夫婦は外見にあんなに睦じさうに見えて、何も苦情
がなかりさうだけれど、僕が主人の居ない時に細君からし
みく打ちあけた話を聞いた。

溫和く見えて居ても、腹が立つと細君の衣服を裂いたり、
櫛を折つたり、随分亂暴をするさうだ。

それで前途の見込があると云ふではなし、私ばかり四方八

方へ氣兼ねして、苦勞しても甲斐がないのですものど悄然て居た。

そんなことを矢張僕に訴へるのだからね、

何うも女と云ふものは皆あゝしたものか知ら、

と、獨身者は得意氣に語つた。

旗

赤い旗を出す、電車は止る。

青い旗を出す、電車は通る。

電車は五つの軌道を分れて行く、少しもたまらない。

赤い旗を出す時に青い旗を出し、

青い旗を出す時に赤い旗を出したら何うなるだらう。

旗ふりは意識がある。

意識の無い旗ふりが居て、何處かて勝手に青い旗や、赤い旗を出してゐるやうだけれど、人は知らない。

草

草が延びる。

草花は餘り延ばさないで、早く摘んで、末を止めて置く方が好い花の咲くと云ふことは知つてゐる。

けれども見す／＼青い葉を開いて、莖が延びてゆくのに、何うも摘まれない、延びるだけ延ばしても花は咲くだらう。

こんなに延ばしてはいけない、自分には摘みにくいものだ、

僕が摘んでやらうと、友人の一人はコスモスの先を皆摘んで行つた。

摘まれた草は早く苔を持つた、株も張つた。

摘まない方は、ひよろ長く延びて未だ苔を持たない、風吹くたびにひよろ／＼してゐる。

早く痛めて置けば宜かつたと思ふ、でも今更摘まれない。

轉宅

裏長屋の端の家では移轉する、下町では生計がたたぬと云つて、場末の方へ移るのだ。

「何うもながくお世話様になりました」

と合長屋の人達にお内儀様が挨拶に廻つた。

「オヤマア然うてすか、折角お馴染になりましたと思つてよろこんで居りましたのに、何うぞ此方へ入らしたたら是非お寄んなさいよ、電車ならわけありませんよ、三ちゃん

アバヨ、又おばさんとこに入らつしやい、可愛いのね、好い顔をして」

如何にもお世辭が好い、流石棟を同うして居ただけに別れる時になると、親切らしい言葉を使ふ。

お内儀さんは近所合壁に暇乞ひして行て了つた。

まだ一町も行くまいと思ふうちに其噂が出た。

「ヤレく助かつた、彼んなお内儀さんたらありあしない襠褌は終日軒に掛けどうし、子供は泣かせる、溝の凌は知らないふりしてる、それで亭主の自慢ばかりしてやがる、何うせ何處へ行たつて續くもんぢやありあしない、世間體

と云ふものがありませぬね』
と又小一時間、去つた人の悪口で持切る。

トンネル

電車はトンネルに入つた。
電気が黠いた。
今まで活々して居た人の顔が、一時に色が變つて了つた。
人間でないやうな顔になつた、凄い、鋭い、淋しい、強い
赤い、黒い、隈のある顔ばかりだ。
着衣の色が皆萎れた、夜の光の下なら美しく見える筈だが
美しくない。

不安の色が顔から顔に漂うた。
 女の頬は俄に削れた、男の骨は尖つた、若い人の血は涸れた。
 晝の隠れ穴に落ちた人間の皮膚は、何の光澤も輝きもない
 日本の繪の具で描いた夕焼雲のやうだ。
 その刹那に未明のやうな浅い光がさした。
 忽ち人の顔は蘇生つた。

泣く女

何を泣いてゐるんですと母親に聞いた。
 何でもありませんよと母親は平氣で居る。
 娘はそこくと逃て行つた、次の室へ行て矢張泣いて居るやうだ。
 彼も惘然ですが今の處、何とも詮方がありませんのでと母親は小さい聲で言つた。
 成程と少しは了解つた。

此家の生活では戀の何のと贅澤なことを言へる境界ではない、勿論そんな噂も聞かぬ。

娘と同年の従弟は此間嫁入した、けれども此家の娘は縁談どころではない、眞黒になつて稼いでゐる、浮いた噂などは少しも聞かぬ、十人並だが何處となく淋しい顔だ。

母は何も彼ものみこんでゐるらしい、娘の泣くのを氣にかけない處を見ると。

母も問はぬ、娘も言はぬ、それで只折々娘は泣いて居る、然うかと思ふと忘れたやうに、稼ぎに身を入れる。

父親はへんくつものだ。

ある朝

我身の上に苦しい事件がふりかゝつて來た、けれども自分には勤めがある。

いつもの同じ時刻、同じ電車に乗る。

今朝は妙に人の顔が遠くて動いてゐるやうに見える、毎の朝も馴染のやうな意がしてゐる乗客の人々が、何だかそらぞらしく、急に他人になつたやうで、自分一人だけ運ばれてゆくやうだ。

女學生が掛て居る巾廣のリボンも、中學生の帽子の徽章も一向氣に留らぬ、動いてゐるものに見えぬ。車掌も運轉手も旗振も、皆自分に關係の無いことをしてゐるやうで、坂は上つたのか、下りたのか、今は何處を通つて居るのか、考へてみないと分らぬ。兩側の家並も、街路の日影も、今朝に限つて知らぬ顔をしてゐる、世の中とうとうしくなつた、よそ／＼しくなつた。

明るい光線が不思議になつて來た、新聞讀んで居る人が羨ましくなつた、皆人が苦勞なささうな顔して居るのが嫉ま

しくなつた、昨日まではそんなことは何ともなかつた、只明るいものは明るく、美しいものは美しくかつた。今朝は明るいものに暗い影があるやうに思ひ、美しいものに偽りがあるやうに思はれてならぬ。違つた道を歩くやうに思ひながら、毎朝來る自分の勤め場所に入つた。

鳥柱

眼界の達く限り、下は海、上は空、うちかへし立つ波、伏す波、くづる、波、萬疊の波は波に連りて、水平線のはてに雲の消ゆる時はあつても、陸や、島の現はる、日は永遠にない青海原、太古より船の影も、人の影も此海原に現れたことがない。何處から来た生物であらう。

幾千枚の白紙が飛ぶ、雪の羽が降る、ひらくくと舞ふ白さ鳥、鳥、鳥、天から降りたか、波から生れたか、海上一面

に舞ふ。

波に乗り、水を離る、翼の軽さ、海草は沈んで見えず、底なく青い海の水、水に舞ふ白鳥、疲れを知らず。

風は何んなに荒れても此鳥を海のはてに吹送ることはできない、浪は何んなに躍つても此鳥を捲込むことはできない。

透徹るやうな聲と聲とが交された、一面にひろかつてゐた白鳥は、瞬間に群をつくる、上に、上に。

天上、銀河の鵲は斜に橋を渡すとかや、これは浪に根ざして、空を支ふる鳥柱、生命あり、息あり、はてしらぬ大海

原の上はらの上に、羽はと羽はとて築ききあげられた揺ゆれる塔た、頂上いたぎは雲くもに入り、根ねは水みづに入る。
一羽は來きたつて柱はしら成なり、一羽は動うごいて柱はしらくづる、浪なみはうねうね水みづ平へいを割かきり、雲くもはゆう／＼天そらに浮うかぶ、はてのはてまで人間じんげんの眼まなこに到いたらぬ大海原おほうなはら、鳥柱とりはしらは立つと云いふ。

曉

毎いづも滅多めつたに開あかない時じ分ぶんに、ふと眼めが開あいて、戸との隙間すきまの白しろんでゐるのを見みると、世よが新あたしくなつたやうに思おもふ。
其そのまゝ覺さめればいゝが、
またうと／＼と寝ねて了しまふ、今度こんど起おきると太陽たいやうが射さし込んでゐる、暖あたたかくなつてゐる。
何なんの變かはりもない。
都會とくわいの空くう氣き、音おと、色いろ、同おなじことだ。

仕事、休息、考察、同じことだ。
折々新しい光を見た時には覚えねばならぬ。

橋

水源も分らなければ、終も分らぬ永い永い時間の河が流れてゐる。

自分は只、或る橋から或る橋までの間を知つてゐるだけで上流に何んな橋があつたか、下流に何んな橋があるか、知らう筈はない、知るやうに思ふだけだ。

自分の初めの橋は、其河の幾つめの橋だか分らない、假に一つと數へる、二つと數へる、數へ數へて澤山になると疲

れる、弱る、痺れる、躓く、然して自分の橋の終りにやれくと息を吐く。
橋の敷などは忘れて了へば好い、一つが千であるやら、一萬であるやら分らないものを數へるに及ばぬ、數へきれないものを數へて疲れて居る、今くどる橋が一つだ、前も一つだ、次も一つだ、今の一つにあやまりはないけれど、次の二つは恐らくあやまりであらう。

雨

少年の頃、雨が怖かつた。
最も傘を持つてゐない時に限つた、傘を持たないと云ふ事が、恐を誘ふたのであらう。
野を歩いてゐる時でも、街を歩いてゐる時でも、はらはらと落ちて來さうな空合になると、鼓動が高まる、顔が火照る、心が沈着かぬ、歩調が亂れる、息かはづむ。
黒い雲を見ると氣になつたものだ、野を歩いて、夕立雲

ても起らうものなら、殆んど生の半分を削られるやうに感じた、今でも少しは雨を恐れる血が残つてゐる。けれども驚かなくなつた、雨降る市中を外套さへ被て居れば、平氣で歩くことかてきる、それだけ何か知ら鍛錬されたのであらう。

睡眠

起きてゐるのは自分だけだ、自分は少しも寝むたくない、誰も寝よと言はぬ。

人間が悉く眠つて、起きてゐるのは自分だけなら、何故自分の魂魄はもつと目覺しく働かないのだらう、多くの人か起きてゐる時と同じだ、自分一人目覺しいことが出来ると思つたのが間違ひだ。

眠つた靈魂も、起きた靈魂も同じだ、眠つた靈魂が夢に働

いてゐると言へば、覺めた靈魂も夢に働いてゐる、何の變り
 りがあらう。

燈火を點けて置いても眠れるのだ。

眠るのはわけない、凡てのものが眠つてゐるからと云つて
 何うすることも出来ぬ、起きてゐても何にもならぬ。

凡て眠つてゐるものを何うかしてやりたいと思ふけれど、
 自分の靈魂と、他の靈魂と、眠つて居ても、起きて居ても
 別々に働いてゐる、自分だけ起きて居やうが、寢て居やう
 が、他の靈魂は關はりなしに好い夢やら、悪い夢やらを見
 て居る。

旅情

私は今、旅の人です、家も、事業も、世の中も忘れて、只
 旅の情が面白く動いてゆくばかりです、私の情はひろく
 とした常陸平の草の上に漂ふて居ます、私は詩を歌ひたく
 なりました、若い女に言葉を掛たくなりました、折から祇
 園祭で、村の若衆は太鼓を叩いて盆踊の稽古です、月は夢
 のやうに森を離れてゆきます、花が空中に躍つてゐるやう
 な太鼓の調に連れて、音頭取る囃し聲は手に取るやうに聞

えてきます、庭一ぱいの月に下り立つと、お才が栗の木の下に洗濯して居ますから、二言三言夜雨の平生を問ひました、多くは語りませんけれど、お才の眼には露がさら／＼と輝いて居ます、夏にしては涼しい晩です、太鼓の音が又一しきり高くなつてゆきますと、美しくしい聲の中には女も交つてゐるやうです、私は見に行かうかと思ひましたけれど、興を妨げても面白くないと控へました、私は今美しくい詩を歌ふて居るやうに思ひますが、言葉にはなりませぬ私は只、魂の浮いてゆくまゝに、騰波の淡海の水の上でも筑波の山の絶頂でも旅の情に任せたいのです。

椽柱に凭れたまゝ夜雨は一言もない、今夜も寂に月の沈むのを待つてゐるのでせう、沈んで行く月を見て僅に慰める心があるのでせう、私は冥想の人を醒ましたくありません私は今、晝の點火を見て居るのか知れませぬ。けれど夢のやうな光が好きです、旅のやうな世の中が好きです、上りかけの月の色が好きです、けれども月は段々白く冴えてゆきます、微かに雲が懸ると、又雲を出ます、盆踊歌は漸く寂しくなつて來ました、花瓣が落るのでせう、野は深き眠りに入らうとしてゐます、私も眠らうと思ひます、起きて居ても、眠つてゐても同じ事ですもの、寂しくなれば眠る

までとす、私の旅には何の不安もないのです、歸らうとも
思はず、行かうとも思はず、おやすみなさいと云ふ、只、
明日も旅なれかしと願ひながら。(筑波の麗なる夜雨の宅にて)

お窓の姉さん

前は草原、子供が能く遊んで居る。
或る家の窓があつて、其處から十三四の女の子が能く顔を
出してゐる、顔の見えない時は讀本を讀む聲か、唱歌を歌
ふ聲か、聞える。
子供等はお窓の姉さんと呼んでゐる。
子供の居ない時は胡蝶が遊んでゐる、馬が草を食べて居る
鶏が餌を拾ふて居る、お窓の姉さんはそれを見て居る。

雲も見える、林も見える、葉の落るのも、實の熟つて居る
の見える、けれども滅多に人の来ない草原だ、お窓の姉
さんは何時までも此窓に凭るだらうか。

曉鐘

たわいない夢を眞實になつて一生懸命に見て居ると——鐘
が鳴つて来た。
夢は何處かへ行つて、
鐘は確かに枕頭まで響いて来た。
鐘の方へ行かうか、
夢の方へ行かうか、
あゝ睡い、甘い睡眠に落ちたい。

うつら／＼となる、
 永い間があつたと思ふけれど、直ぐ
 次の響が根を強く打ちこんだ。
 暗い中に聞いて居る。
 目を覚ますには早い。
 睡眠の方へ行かう。
 鐘はまだ尾を曳いて居る。
 まだ——まだ——
 まだ——

晩鐘

隣の寺の門がしまる刻限に、鐘が鳴る。
 ごーんと初めの撞出しに壓迫された魂は、
 ん——ん——んと後へ顫ふ。
 呼吸がひろがる。
 刹那が躍る、浮くやうに沈むやうに、
 刹那の影が空の彼方に漂ふて行く。
 たよりない姿よ。

もう滅多に覺めないよと言つて、今にも地を踏みはづしさ
うに、ん——ん——ん——と微かに呻吟ながら——。

又、鐘が鳴る。

新しい力。

力は直ぐに抜けて行く。

ん——ん——と蹠踉てゆく刹那の呼吸はながい、ながい。

光の下にて

瓦斯の火や、電氣の火や、明るい光の下で若い人が澤山集
つて賑やかに話してゐる時。

何處かの山林の奥、一度も人が足踏入れない深林の木立の
下は二三尺の落葉が積つて、獸が走らうが、鳥が鳴かうが
木が朽ちやうが、枝が折れやうが、花が咲かうが、毒草の
實がならうが、只其下には晝とも夜とも分らぬ暗黒がある
ばかり、今、其處に何かしら小さな小さな生きてゐるものが
動いてゐると想つてみたまへ。

野

偶に通つた轍の跡が長くつゞいて、草の生た田舎道の兩側に若い林が緑してゐる。

林を抜けると、野は斜めに高まつた丘と、森と、雲と、天とに劃られて、ありふれた油繪のやうだ、ありふれた、油繪にも光線と、空氣、を與へると新しい生命がある。村が見えない、離れた家も見えない、人間の影もさうな

う。

眞晝野の静かさ。

家に居ても、外に出ても、寝ても、起きても、片時も人間と離れることが出来なかつたのに、久しぶりに人間の氣の絶えた野を歩いてゐる。

人間の中に居ると人間が分らぬ。

斯うして獨り人氣離れた野を歩きながら、暫く忘れてゐた人なつかしい味ひを、しみじみ味ふてみたいと思ふ。

松風

少しも雑木を交へない小山の傾斜面に、同じやうな丈の若松が生えてゐる、風の音が違ふ。
 絹の目をこすやうな、柔かい、細かい、如何にも細い葉を透してくる風の音。
 女の着物が觸つてゆくやうな軽い、美しい、また、清い音だと思ふ。
 よせてくる音はなつかしいやうに、引いてゆく音は淋しいやうに、單調な響を繰返す若い松の晝間の想ひ。

翼の響

ふと眼が覺めた。
 風が吹いてゐるとも思はれないのに、空中に響がする。
 寐てゐながら能く聞える。
 大きな、大きな鳥が翼を一ぱい擴げて暗い雲の下で羽ばたきしてゐるやうだ。
 強く打つ響。
 弱く收める響。

しきさりなしに聞える。
翼は黒いやうだ。

揺れる花

の
伸びた草の上に紅い花が咲いてゐる。
と
取らうと思つて草の中に手を入れる。
はな
花がゆらめく。
これだらうと抜く。
て
手に持つたのはたゞの草、花もない、苔もない。
また
又手を入れる。
これか〜と握つてみる。

花がはげしく揺れる。
 これにちがひなからうと抜いてみると又ちがう、
 ゆらくと花が動く。
 まだ草の上に紅い花びらが揺れてゐる。

すれちがひ

生垣つゞきの淋しい屋敷町、捷路を取つて若い女が行く。
 晝の間とは言へ人通りが無い。
 向ふから書生が三人来た。
 すれちがひさま一人が、姉さんと聲を掛けた。
 女は顔も紅潮めずに澄してゆく。
 今一人の男は、
 君待ちたまへな、

と嫌な聲で言つた。
 女は少し微笑んだが、姿も亂さず、歩調も急がず、平氣に
 行て了つた。
 書生はもう外の事を高い聲で話してゆく。
 斯くて都の町には若い男と、若い女とがすれちがつて行く

涙

私は泣いたことがなう。
 一度あつた——十七の時——胸から出る涙の熱いことを初
 めて知つた。
 其時のやうな熱い涙は何うしても二度と出ない。
 人間の泣く時に泣けなくなつた。
 何うしても泣けない。
 涙か靈魂の底の底の方へ沈んで了つて、

いつかは此涙が、外に出ることがあらうとは思ふけれど、容易に出て来ない。

脈搏

醫師の来るまで、子供の手を握つて脈搏を見る。
體温三十九度。

脈搏？

時計を出してセコンドを凝視する。

約百十九。

又數へなほしてみる。

約百三十。

餘りに早い、まぢがひだ。

又數へなほしてみる。

約百〇八。

何うしても正しい數が分らぬ。

九つになる子の一分間の脈搏の數すらわれ／＼には正しく分らない。

窓のあかり

窓から火光が射して居る。

窓は四角な西洋窓で、樹立隠れに火光が透いてゐる、小さい月が屋根の上の一つ、屋根が尖つてゐたら子供が持つカードの繪だ。

前の原には霧が薄くかゝつてゐる、窓の火光が懐かしい。仕事を爲て居る人か、それなら火光がもつと明るい筈だ、書物を読んで居るにしては火光がひろすぎる、誰も居ない

のか。

いや／＼居る、屹度居るに違いない、女か、女の火光だ。室には花がある、樂器がある、油繪がある。而して女が居る、靜かに何か考へて居る。

窓の下まで行けば足音に怪んで立つだらうか、開けるだらうか、影が映すだらうか。

いつまでも／＼開けないで欲しい、そして彼の火光を毎晩見たい。

火光は少しも動かない。

舞臺

此處は自分の舞臺だ。

此處は自分の舞臺だ、と、銘々手さぐり、足さぐりに暗闘してゐる、少しでもひろく、大きく見せやうと。

初めは見物も只ワイ／＼と喝采してゐる。

暫くすると、同じやうな手ぶり足どりに、少し倦いて來たけれど、舞臺の人は氣がつかぬ。

其間に少しづつ、舞臺は廻つてゐる。

只、自分の舞臺を失ふまいと、一生懸命に跳たり、踊つたりしてゐる、互に觸らないうちは大手を振て居る、觸ると攫み合ふ、斬り合ふ。
 其時分に見物はもう新しい背景と、新しい踊とを見て居る舞臺は廻つて了つた。
 けれども前の人は、前の背景を後ろにして、
 此處は自分の舞臺だ、
 此處は自分の舞臺だ、と、暗闘を續けて居る、前に見物は一人も居ないのに。

都會の足音

大都會の中央の高い石造の家の窓に凭れて、聞いて居ると夕方でもない、朝でもない、午後三時頃のひびき、騒しくはないが倦怠いやうな、高くはないが重いやうな、旋律もない、和聲もない、單調で、波動の廣い音響が聞えて來る、都會が歩く足音だ。
 又は緩やかに、又は忙しく、人の歩いてゐない通はないが一人々々自分の歩いてゐる足音には氣がつかぬ、土の上、

石の上、木の上、鐵の上を歩いてゆく人は、推しつ推されつしてゐる、自分の足音は知らぬ、人の足音も知らぬ。高い窓に聞ゆる足音は、一人や二人の足音ではない、大都會の歩いてゆく足音だ、大都會の足音は斯んなに高く遠く轟いてゆくけれど足跡は何處に残るのだらう、大都會を歩いて居る人の足音が一つも残らぬやうに、大都會の足音も亦一足／＼消えてゆくのであらう。

闇夜

星が空の底に沈んでゐる。

晴れてゐて、

こんな闇の深い晩はない。

一足歩いて、

空虚を探ると物に觸りさうだ。

鳥の寝息も聞えさう。

木の幹が前を塞いでゐさう。

竹藪が上から被さりさう。
 手さぐり、足さぐり、
 闇を闇に進んでゆく。
 何にも觸らない。
 何處までも夜の六氣の静寂に包まれた野原。
 物にさへぎられても恐ろしいが、
 はてのない闇も心細らう。

力のない日

今日は何うして斯んなに力がないのだらう。
 物を持つと落しさうになる。
 眠いやうな、だるいやうな。
 靈魂が弱つてゐるのかしら。
 何かの前兆かしら。
 家には何事も無い。
 世間も静かだ。

晴れてゐるのに、光が鈍いやうに思ふ。

もつと眼を開いてみやう。

あら、とう／＼手からすべり落して盃を破つた。

無意味

お前の胸の中は私が知つてゐる。

言ふな、言ふな、何も言はない方が好い。

而して私が能く似合ふと言ふ紫が、つた白い薄い着物を
着て、いつで、忘れぬやうに白粉をつけて、美しくて居れ
ば好い。

言ふことがあれば、夏の雲は美しい、夏の花はあかる
い、風が懐ろをさぐつていつたと云ふやうなことばかり言

へ。

外に何も言ふのではない。

お前の言ふことは皆私が言ふてゐる。

泣きたくなつたら泣くが好い、それも黙つて――

嬉しくなつたら笑顔をすれば好い、歌を歌つて――

そして折々何か分らぬ意味のない言葉でささやいてくれ。

きもの

脱ぎ捨てた四五人の女の着物が室の中に堆くまろめられてある。

彩色のはれ々しい、觸感の柔かな、絹布の着物ばかりだ。

燃えるやうな緋縮緬の長襦袢や、桃色の八橋のくけ紐や、

一番下へ着る白の筒袖の半襦袢などには、未だ温味がある

やうに見える。

納戸色の縮緬の新しい羽織と、栗色の羽二重の少し古びた

羽織とが、さも疲れたやうに用捨なく重なり合つてゐる。子供の着物は皆躍り出しさうだ、光淋と、明治と、元祿と、アールヌーボーと、四條派と、江戸と、西京との擬作が、單純な線と、色彩と、形とに現れてゐる、紅梅色の水や、白い大きな葉や、萌黄色した花や、子供の眼には不思議に美しく映るのであらう。

玉蟲色に輝く甲斐絹の下に、小紋縮緬があとなくうづくまつてゐる。胸の邊りが乳のやうに膨らんで、腰から下の方が一面に皺よつて、行儀をくづして了つた。

脱いてある女の着物の上には、なまめかしさと、あつたか

さと、誘惑と、虚榮とが彷彿て居る、虚榮心、女に取つては命に代へても宜い虚榮心が、此處にお留守をしてゐるのだ、女が歸つて來て着るのを待つてゐるのだ、美しい虚榮罪のない虚榮、着物だけ置いてある處を見ると、女の虚榮は許すべきものだと思ふ。

幾枚も重ねたまゝに袖が亂れて、八口から流れ落ちさうな水紅色が、能く女を語つてゐる。

閉切つた室には衣の香が籠つた、まだ外の光は明るいけれど、電燈を點けた、室の光線はパット變つた、女の着物は

一時に夜の色に目覺めた、欺かれたる虚榮は更に美しく見えた。

花 瓣

都會などが此世に在らうと 思はれぬほど、空氣が靜寂に暮れて行く平野の一村、聞えるものは何もない。
家も舊い、人も舊い、言葉も舊い、森を離れやうとする月の光も舊い。
盆踊の太鼓が鳴り出した。
ドコドン、ドコドン、ドコドコドンと緩やかに鳴り出した調子は次第にはづんで来る。

はづんで來ると花瓣が空中に踊つてゐるやうに想ふ。
赤い花瓣や、桃色の花瓣がバツと咲いて、空に翻つて居
る、思ひ思ひに踊つてゐる、ドンツと高く舞ひ上るかと思
へば、ドコ、ドコ、ドコと落ちて來る。

野も舊い、歌も舊い、戀も舊い、聲も舊い。

定紋を描いた舊い提灯が一つ入つて來た、舊い家の舊い井
戸から水を汲んで飲んで居る。

花瓣は一度に皆地に落ちた、しづかに、さはやかに夜の空
氣が沈む。

また太鼓は鳴り出した、少し急き込むやうな調子で。

燃ゆるやうな色は少し衰へたけれど、思ふまゝに花瓣は漂
ふ、忽ち狂ふやうに、忽ち収るやうに、とぎれ〜。

木の葉には露が煌めいて居る、響の絶間は水の底に居るや
うな静寂さだ、何うかすると力の無い、眠いやうな、沈ん
だ響から、ふと覺めて、また明るい、高い調子になる。

夜は深くなつた、もう何んな花瓣も夜の氣に恐れて縮むて
あらう、太鼓も頓て打止むてあらう。

信濃町の月夜

廣い野原の一方の縁を縫ふて、僅に一臺か二臺か電車が走る、柱の火は淋しそくに輝いてゐる。
 地下の停車場に能く馳る電車が着くと、着くと一瞬間に動き出す、其間に人が乗つて、人が降りるのであらう。地とすれすれの架空線が、忽ち強い痙攣を感じた、眼を射るやうな青い火が燃える、電車は地の下を通つて行つた。
 橋の上から見ると前にも、後にも小さな停車場がある。其

ささにもある、蒸気を吐く音、汽灌の動く響か聞える、汽笛が鳴る、長くつゞく汽笛と、短く急に鳴る笛とが、近くなつたり遠くなつたりする、架空線の線條は絶えず微かに顫ふてゐる。
 遠い兵營の窓からは灯が洩れる、見えたり消えたりする、兵營の上に輝いてゐる月、原一面の霧が白い。
 原の一部には廢線になつた軌道が其まゝ草に埋れてゐる、草が枯れて四條五條夜目にも地に線を引いてゐるが、其さきは霧の中に消えて了ふ。
 壊れた柵が何の爲ともなく残つてゐる、途は何うついてゐ

るのか分らない、歩いてゆけば原になるばかりだ、二三本の柳の樹が此さは分らぬぞと云つたやうに並んで立つてゐる。

人の聲は全く聞えぬ、そしてものゝ響は刻々に迫つてゐる霧と月の外に一つのあかりも持たない原の一部に、都會から送つて来る光が輝いてゐる、電車は絶えず來往する。眠つてゐる野原、覺めてゐる都會、近よりさうでまた別れる、其間を霧が立つ、月が更けてゆく。

山頭火

お前は山頭の火性だから、大きくなると何處まで大きくひろがるか分らぬ性質だと、幼少い時、能く祖母さんが言て聞かしてくれた。

何を對象とすれば大きくなれるかと思つた。

人間業でやることは皆つまらない、人間に逆も對象にならぬ。

況して人間の中の英雄豪傑君主聖人、少しもなつてみやう

と思はぬ。

そんなら神であらうか。

神に對する信仰の無いものが、神にならうとも思はない。

或る生命と云へば可い、或る力と云へば可い。

併し其等には形が無い、象のあるもので、我は何に對つて

大きくなればよからう。

神でもない、人でもない、何を對象とすれば大きくなれる

だらうと深く考へた。

自分だ、自分だ、自分ほど大きいものは無いと思つた時、

胸の火は燃え上つた。

非人間

憎い奴だ、嫌な奴だ、物も言ふまいと思つてゐる。

處が傍へ来て、親しく顔を見合すと、なまじひ人間の形體

をして居るだけに、物も言ふ、會話もする。

傍に居ないと矢張憎い奴だ、嫌な奴だ、人間の形體をして

ゐるやうに思はない。

成程、或る者を隠す爲に人間の形體が出来て居るのだ、露

はす爲ではない。

いくら露はすと云つても、露はれないものが、底に深く沈んでゐる。
獨で居ると露はれてゐるが、二人になると隠れて了ふ、憎まれたものは幸ひだ。

塀の外

大都會の中央に幾町かあらうと思ふ折廻した角邸宅、人が住んで居るのか、居ないのか、分らないやうな奥の方に母屋がある、土塼がある、離座敷がある、庭がある、廻らした樹立は森のやうだ。
其上に石を疊んで、土を塗つて、厚い塀で圍んである。
塀の外に溝がある。
溝は浅く。

何處の子か知らぬ、三つ四つ位の男の子が溝に座つていた
 づらしてゐる。
 如何にも此處は自分の場所だといふやうに、喜悅に満ちた
 顔をしてゐる。
 森のやうな木立も、城のやうな塀も、此子供の前には何の
 威嚴も無さう。

夢の杜

若い男の夢が抜けて、
 若い女の夢が抜けて、
 同じ杜に姿を現はした。
 或る一人は、或る一人に限つて語るであらうと信じて居た
 のに、
 若い男でさへあれば誰とも語り、若い女でさへあれば誰
 とでも語るの、一人一人の夢は、すゞくと一人一人に
 歸つて行つた。

表まで来た人

生垣は透すいて居ゐる、家の燈光あかりは道路みちに洩もれる、話聲はなしこゑも聞きえる、栗焼くりやく香かほりもする。

其晩そのばんは誰たれも來こなかつた。

翌日あくるひはがきが來きた「昨夜さくやお目めにかゝらうと思おもひまして、御宅お宅の表おもてまで參まゐりましたが、もうお目めにかゝつたのも同じおなやうに思おもひまして、又電車またでんしゃで本郷ほんがうへ歸かへりました」と書かいてきた。

自分じぶんは此男このをとこが好すきになつた。

生國うまれは九州しゅう、短歌たんかを好よくした、大おほきな身からだ體たいをしてゐながら面めんと向むかふとろくに話はなしもせず、明あかるいランブランプを持もつてゆくと顔かほを背そむける、女をんなでも傍そばへ來こやうものなら猶なほ更さら小ちひさくなる。

一ひと度ど來きたゞけであつた。

又また九州しゅうへ歸かへつて了しまつた。

つぶて

生垣つゞきの舊い家や、まばら竹垣の新しい家もある原宿の邸宅町を、ぶら／＼歩いて居た。

能く晴れた秋の日だ。

ハタと出會つたのは、もと新聞社に居た男だ、夏服らしい背廣を着て居る。

「やはり新聞社の方ですか」

「ハア社の方です、此邊に移轉て來たいと思ひますが、空

いた家で適當なのはありますまいか」

「然う、あるでせう、探して御覽なさい」

細君が出來たやうに思はれない、それとも母親とても住まうと云ふのか。

家賃のことなど二言三言話した、何の爲に家を探すかと深入りして聞くほどの親しい間柄でもない、一年餘り逢はなかつたから變つたことのあるには相違ない。

ハラ／＼と小石が降つて來て、二人の上へ落ちた。

上を見ると柿の木が枝を出して、赤い實が能く熟して居る只「左様なら」と言つて別れた。

戀の詩

顔を見つると戀をしさうな男でない。
 話をしても女のことなどは殆んど言はない。
 それが詩を作つて來たので、見ると殆んど戀の詩ばかりだ
 戀をしないやうな顔をしてゐる彼が眞個か、戀の詩を作つ
 てくる彼が眞個か、疑つてみた。
 戯れに作つたのでは無いと知つた時に、暗い經歷を持つて
 居ると知つた時に、女の事などは半分も言はないて居て、
 戀の詩を作る人を憐れだと思つた。

空虚

淋しい眼と、淋しい眼とが冷たく疲れてゐる、冷却た水を
 飲むと、胸の下を流れてゆくのが分る。
 物足らぬ明るい火光のかげに、もう探すものはなく、渴仰
 に欺かれて、空虚なる大伽藍の石の床に、獨り取り残され
 た。
 もらはうと思つた魂は、もらへるものではなかつた。また
 會はふとするまでには何んなに遠く動いてゆくか知れない

暮れたばかり

暮れたばかりの十字街。
赤い光と黒い影が動く。

留つてゐる電車の照燈の前を、黒い影法師が斷續なしに走せ違ふ、人の飛び抜ける中を關はずに電車が動く、ボールが外れる、紫の火が落ちて来る、車臺は軌條を逸れさうにして曲つて行つた。

旗を捲いて燈火に代へた信號の青い火が赤くなつたり、赤

い火が青くなつたり、隠れたりする、けたましくベルが鳴つた、ゴム輪が舗石の上を浮いて行くと、女らしい白い脚だけが續いて走つた。

人が鳥のやうに電車の中に翔込んだ。

屋根の上のイルミネーションの色が、暫くの間も止つてゐない、色が代る、火が動く、呼吸するやうに。

黄色い霧が立つ。

星の輝いてゐることなどは、誰も知らない。

捲簾の火の粉が溝の中で碎けた、檐の下に眼が光つてゐる。

荷をほどいた空箱と、小さなボール箱と、洋紙の屑と、細屑と、筋金とが往來に散らばつてゐる。蓄音器の三味線が鳴り出した、流行唄をうたひ出した、キイ、キイ、と歌がさしる、聞いてゐた女の羽のシヨールが引かゝつて地に落ちた、馬の首が肩から覗いた。硝子戸が開いた、フライの匂が風のやうに追いつて行つた。物食べたさうな人が、暗い狭い路を覗くやうにして入つた。郵便配達が黙つて人をつきのけて行つた、夕刊のチリンチリンが一町もさきから駆て来る。點いて間のない瓦斯の光の烈しいまたゝさのかけにも若

い男の鋭い眼には、若い女を見免すまいとしてゐる。空が餘り早く暮れたので、僅に地上の火光を頼りに、行く處に行き、歸る處に歸らうとして、浮足立つた人々の落着て了うのを、夜の寂靜が待つてゐる。

肉聲

薄い色絹をしごくやうな女の肉聲に心ふるふ。

何を語る。

何を歌ふ。

無意味の鳥の聲に聞惚れて、心が空に開く。

生きた聲の表情が胸に響いて、開けたピアノの上に落る花

瓣の快い響よ。

顔よりも、姿よりも、服粧よりも。

女の肉聲に亂れた心。

毛髮

山門の仁王様の大掃除がある。

塵埃は山のやうに出た。

廣い寺の地面から掃寄せた落葉と一しよに、仁王様の塵埃

に火をつけた。

大きな草鞋がくすぼる、お札の白い紙片が燃え上る、繪馬

が焦げる、赤い布の色がかはる。

昨日の朝、淺黄の紋羽二重の羽織を被た女が一心に仁王様

に祈つてゐた。
 若い女であつた。
 眼を冥つてゐた。
 白い顔であつた。
 獨であつた。
 暫く拜んでゐた。
 仁王様の塵埃はなかく燃えない、霜に濡れた落葉が火氣に烟るばかり。
 寺男は枯枝で塵埃の中をすけた、女の髪の毛が枯枝に纏ひついた、火は風を得て一時にバツと燃え立つた。

鼓の音

一步踏めば岩角、山彦は後に應へ、
 一步踏めば木の根、山彦は前に應ふ。
 山の魂、深林に吼え、小鳥を膝にした獨の緑の女、空に嘯く。
 眼前に現出た林は、忽ち谷に落ちた。
 時は遙にまるみのある、線を伸ばして、雲に合ふ。
 膝なる鳥は飛んだ。

大きい翼に山は隠れた。

鳥が去ると、山の果實はしたゝかに落ちた。

爽やかに葉の上を流れてゆく水が、皆女の裾にたまる、岩

を飛ぶ緑の女は、飛んで、飛んで行方を見失ふ。

山は驚いた。

失ふた女を求める聲が、岩窟の奥から、朽木の空虚から、

鳥の巢から、紫の花の底から、檜の枝から一時に起つて、

木魂は一時に其相を現さうとした。

若氣

何處までも吾儘を通してみやうと飛出してみた。

外は暗い。

びしょくくと雨が降つてゐる。

何處の家も閉てゐる。

此深夜にうろくしてゐる人間は一人もない。

誰も言葉をかけてくれるものがない。

街がある、家がある、戸がある、戸の内には室があつて、

寢床があつて、蒲團があつて、人は安らかに眠つてゐる。
 暗黒な夜に、眠つた街を歩いて見た處が、對手になつてく
 れる人もなければ、自分の居るべき場所も見當らぬ。
 地面は冷たい。
 細い雨に濡れながら、町を一廻りしてすごくと自分の家
 へ歸つて來た。
 吾儘は何にもならなかつた。通せない吾儘なら服従するよ
 り外に仕方がない。
 泣寝入りに寝入つた。

臆病

笑つて下さい、私は臆病なんです。
 遺傳でせう。

私はあなたから誘惑されることを欣んでゐます、面白い機
 會を無言で過したことも知つてゐます。
 けれども、あなたと一しよに浮名を流さうとは思ひませ
 ん。

ものゝあはれを知つてゐる者が、何うして戀をせずに居ら

れませう、でなけりや詩は出来ません。
 私はもの足らぬ世の中に馴れました、實行の世の中へ行く
 ことは、下へ降りてゆくやうで氣持が悪いのです、負惜み
 かも知れません、人間以上の戯れのやうに思ふ時だけ、戀
 ても、詩でも、私には切實です。
 矢張囚はれてゐるのでせう、世間の人から見ると臆病なん
 てせう。

うたゝね

日が暮れない。
 疊の上でうたゝねをした。
 眼が覺めた。
 まだ長い夕暮が続いてゐる、何程も寝かつたらしい。
 眠る前にも何も思はなかつたが、起さても何も思ふことが
 ない。
 落たばかりの夕日の色が障子にあかい。

鳥が囁つてゐる。

私は斯うして何時までも静かにしてゐたい。

動くものは一つもない。

心も動かない。

今、大きな車輪が私の上を軋つて行ても、私は動かずにゐ

たい——うたゝ寝の覺めた時——

近くのお寺で梵鐘が鳴り出した。

場末

日が暮れたばかりで、カンテラの灯が未だちちついてゐな
す。

草のやうな菜葉と、泥加石のやうな芋と、腐りかけた果實
とが、店頭に並んである。

何の肉やら分らぬ赤い色の肉を切り盛りした皿からは、水
の雫が垂れてゐる。

買ひたさうな人が彷徨してゐる。

カンテラの油煙は高く上つた。

少しの風に白い塵が立つた。

暗い火の間から大きな顔が動いた。

馬だ。

家とも、小舎とも分らぬ軒下に馬を繋いで、大きなバルカ

ンで馬の毛を刈つてゐる。

馬は神妙に四脚を揃へて立つてゐる。

魚の脂肪の火に落ちる臭がする。

道ゆき

此花を摘みませうか。

摘みませう。

あなたからち摘みなさい。

あなたが摘んで下さい。

では一しよに摘みませう。

いや、あなたから何うぞ。

今はよしませう。

よしますか、まだ後にもあるでせう。

あら、水だまりよ。

困りましたね、飛べますか。

さア。

私は先へ飛んで手を引いてあげますから、一、二、三と、

やア、泥水だ。

いけませんよ、衣服の裾が。

なに造作ありませんよ、さア手をお出しなさい。

待つて頂戴よ、私怖いから。

大丈夫です。さア早く。

待つて頂戴よ、何うしたら宜いでせう。

逡巡してゐますね、ぢやア此石と、草と、可し、これで宜

いでせう、此處へ片脚かけて。

ありがたう。

ほら、どつこいしよと、

あゝ怖かつた。

先へ入らつしやい。

細い道ね、

一人づゝしか歩けませんね。

全くだわ、二人歩くと落ちてしまうのね。

廣い道は趣味がありませんね。

私、後になりますわ。

代るんですか。

ハア、待つて下さいよ。すべりさうだから。

宜しいか。

ハイ、何うぞ入らして下さい。

何だか險呑ですよ、河がありさうですよ

河？、威嚇しちや不可せん。

何だか然う想はれますね。

想はれるだけならようござんすけれど！。

在つたら何うします。

行ける處まで行きます。

また飛びますか。

飛びますよ。

塵 烟

灰色の烟のやうな大旋渦が地の上に吹き起る、風の底に塵が舞ふ、砂が飛ぶ。

烟が落ちる、ちぎれる、またかぶさる。

市街が暗くなる。

人が捲き込まれる。

乾風が陣を引いたかと思ふと都會の象が浮ぶ。

白い顔の女、藍がいつた色のシヨール。

裾を抑へてゐる。

再び来る、十字街頭の龍捲。

灰色の烟が舞ひ上ると、瞬間、美人の姿は消えて了ふ。

寒い日

寒い。

太陽は何處を歩いてゐるか分らない。

光は空一面に灑んでゐる。

手頭が麻痺れる。

皮膚の潤澤が涸れる。

息が白す。

往來が白す。

曝されたる家よ。

飢た男が往來を歩きながら、何でも木片があつたら燃やそう

と思つてゐる。

火！と叫んだ。

酒と、女と、火と。

彼の顔は獸のやうになつた。

消えゆく日記

茲こゝに書くことは、夢ゆめの中の事實じじつもある、現うつの中の空想くうさうもある、皆みな取りとめのない消えゆく日記にっきの片かたはしだ。
突然とつぜん自分の右みぎの胸むねの皮かはが外はれた、胸むねの皮かはを透すかして見ると半透明はんとうめいの雲母きららのやうでもあり、又白膠またしろにかはのやうでもある、厚うっさは一分許ぶはり、しらちやけた色いろ、心こゝろもち鬩ひたがついて、少すこし彎形ゆみなりに反そつて居ゐるのは、胸むねの皮かはだからであらう、外はれた縁よちは斜はになつて、うまく嵌はめ込まれるやうになつてゐる、そつ

と下したに置おく、次つぎの室まへ出でた。
誰たれか持もつて行きはしないかと氣きになるので、戻もどつてみると驚おどろいた、胸むねの皮かはは二つに割われてゐる、誰たれか踏ふんだのかも知しれぬ、繼ついでみるとうまく合あふ、微塵みぢんの隙すきもない、併しかし醫師いしに能よく聞きいて嵌はめないと間違まちがふといけない、卓子てえぶるの上うへに静しづかに載のせて次つぎの室まに出でる。
暫しばく經たつて又氣またきになるので、歸かへつてみると胸むねの皮かはは卓子てえぶるの上うへに見みえない、何處どこへ行いつたか知らずと仰あやむいて視みると、前まに二つに割わられた胸むねの皮かはは、八つにも、九つにも破やぶられて、一つ一つ端はしに小ちさな穴あなを穿あけ、梁うつばりの釘くぎに、一つ一つ掛かけて

ある、大きいのもある、小さいのもある、誰が破つたのか
 分らぬ、繼合せて以前の通りになるか、それも分らぬ。
 此時まで気が着かなかつた、けれど自分の胸を見ると、皮
 を取り去られた跡は、肉が幾段にも畝を爲して、白い柔か
 さうな肉の上に、血が花のやうに染つてゐて、觸ると痛さ
 うだ、冷たい風が其間から吸込まれて、全身に廻る。

働くのは嘘だと思ふ、人間に交つてゐれば嘘でも働かねば
 ならぬ、あるだけの人間に嘘を云ふより、一人だけで可い
 から誠實を語つてやりたい、その一人が何う探してもな

ろく探してみたら一人あつた、自分の子だ、自分の子
 の一人だ。

人間に歸らうと思はないから、一人の子を從へて山を登つ
 て行く、何處までも登つて行く、休んでは語り、語つては
 休む、少しも嘘を言はないでも、子供は面白さうに聞く、
 此子だけは人間になるのだと思ふ。

人間になつたら人間に歸れない、子供は山を降りたくない
 と云ふ、花を摘んだり、蟲を追ふたりして從いて来る、何
 處まで從いて来るだらう、今に歸りたいと言出すだらうと

少し懸念になつて、顧返つてみると、少しも苦痛らしい表情が現れてない、やす／＼と登つて来る、却つて自分が苦しさうだ、苦しさうではいけないと、心を平かにしてみる。

人の死ぬ際を見てゐる。

今、息を引取らうとする時に、病みほけた老女の肉は、次第に消え滅びて行く。

みる／＼肉は全く無くなつた。

骨の組織は人間と違ふ、魚のやうでもあり、獣のやうでも

ある。

骨だけになつて、人間の息はなくなつただけけれど、まだ何處かに生きる力があると見えて、動き出した、動き出した、初めは獣の飛ぶやうに、後は鳥の飛ぶやうに、空中さして飛び去つて了つた。

後には何も残らない。

私の仕事は女の中でする仕事だ、見るもの、聞くもの、考へるもの、書くもの、皆女が傍にゐる、姿は見えないけれど、女の心持の中に生きてゐる。

私の家庭も女ばかりだ、女と一しよに語り、女と一しよに飯を喰ひ、女と一しよに寝る。
斯う女ばかりの中に生活してゐる間に、だん／＼女性化して了へば面白からう、男は何うしても女になれないけれど女ばかりの中に交つて、自若として、女を忘れたい。

都會の夜は闇として更け渡つた、闇の中を轟々と走る電車一臺、赤い電燈を點けてゐる。

乗つてゐるのは一人だけ、何となく恐ろしくて外を見る氣にならぬ。

電車は少しも停留らずに走る、風を切る響は、闇の中に残つて、後ろから大きなものが追駈けて来るやうだ、チリンチリンと鈴がひびく、何もない、街樹の下蔭をすかし見て車掌は無言、つゞけさまに緒を引く。

機械が自然に動いてゐるだけで、人間が動かすと思へない。紫の火が飛ぶ、赤い光がゆらめく、柱の上の光は疲れたやうに輝きがない、電車は停留ることを恐れるやうに走りつゞける、窓の外には陰森の氣が迫る、光の明るい車内の腰掛には、晝乗つた人々の幻覺があり／＼と浮ぶ、車掌は戦慄した。

押し押されつの大群集、人の波、息の潮、脚は宙に浮く、胸が板のやうになる、後へも返されぬ、向ふへも進まれぬ、大地が轟く、人の言葉は大いなる合奏となつて、何の意味をもなさない。

人の群集か、動物の群集か分らぬ、只押される、押し返す暗い晩だ、火光が少い、暗い内に何か知ら揉み合つてゐるのだ。

是だけの人で踏み轟かしても、大地には何の足跡も印さない、潮のやうに人が引けば、都會は以前の寂寞に復る。

是だけの人が集つても、各自の考は、各自の考で分れてゐる、押すと、押されるとの外は何のつなぎもない、意味のない力だ、ばら／＼の力だ。

大群集の中に押込まれながら、自分は寂しい寂しい氣がした。

庇の間に往んでゐる猫が、二匹の子猫を産んだ、其内の一匹が屋根から落ちた、垣根を上るには爪が立たなかつた。親猫は折々降りて来て乳を哺ましてやる、親猫が屋根へ上ると悲し／＼に啼き廻つた、其聲を聞きつけた表の小犬は

好い玩弄物が出来たと云ふ風に子猫を弄んだ。
親猫が唸ると犬は逃げた、居なくなると子猫をなぶつた。
屋根へ歸ることの出来ない子猫は、遂に犬に殺されて了つた、小さな體を地に横へた。
小犬は是か何うして、動かなくなつたらうと、さも不思議さうな顔をして、半日許りも傍に踞つてゐた、親猫はもう降りて來なかつた。

霧降る夜

ひやひやと霧降る宵の
街の樹は遠のく姿
家と家遙に對ふ

あざやかに青き粟頭ふ
街の灯の疲れし影に
消ゆる人現はるる人

畫見たる文字の象も

色彩もありとや想ふ
すかし見る闇の深きに

轟きは彼方に消えて
大都會も軽やかに
薄霧の底に沈みぬ

我いのち確かに置けど
浮城は今や千尋の
霧の海隠れてゆきぬ

秋の湖畔

男は二十、女は十六、しかも田舎で育つたから年齢より若く見えるので、兄妹と思つたのは至當だ、却つて宿帳に正しく妻と書いたのを怪んで、女中などはヒソ／＼と蔭口をした、此夜の泊り客の噂は此二人の上を集つたらしい。

「此を茶代に取つて置いて下さい」と一圓紙幣を二枚状袋に入れて擲り出したさき、宿賃も糺かねば、酒の注文もない、亭主は頗る恐縮して、女中に吩咐て、初め通した

室から、更に幾室か奥まりたる此家の最上等の十疊の室に案内させた、此室には賈物の大幅も掛つてゐる、盆栽もある、碁盤もある、違棚の上には二年程前の文藝俱樂部が五六冊載せてある、蒔繪の衣桁と、西洋鏡臺は最も此室に光彩を放つもので、桐の長火鉢の餘り大きくないのも洒落れてゐる、亭主は敷居際まで来て幾度もお辭義をして、此頃は思ふやうに魚が捕れないと云ふことを、くどくどお詫した、二人は亭主の辭を黙つて聞いてゐた、何の爲に此んなにお辭義をするのだらうと思つた、二人は泊りさへすれば好いので、魚か旨からうが、不味からうが、そんな事に氣

を掛けて居ない、成るだけ、人が傍へ来ないやうに願ひ、成るだけ他に物を言はないやうにして居たかつた。湯が湧いたと知らせに來たので、女から先に入つた、男も次いで入つた。湯は汚くもないが、二人とも水の嗅いのに閉口した。近江は美しい湖水を抱いてゐる、小波や滋賀の浦わの一夜泊りに、此んな嗅い水を使つてゐる家があるとは思はなかつた、口を漱いで却つて心持を悪くした、茶をかつがつと呑んで、干菓子を摘んだ、米の粉を食べたやうで少しも甘くなかつた。

二人は長い廊下を傳つて、表の間へ出た。「お出掛でござい
ますか」と言ひながら、番頭は飛んで來た、二人の履物を揃
へた、二人は何處へ行くとも言はないで、「ちよつと」と云
つたまゝ、表へ出た。「おしづかに行つておいでやす」と二三
人の女中の聞が後に残つた。

直ぐ後ろの石山寺へ參詣した、是は何とかの室、是は何と
の室と諳誦的の説明を聞いても、一向若い者に寶物の有難
味か分らなかつた、文學を愛する男は、紫式部とはもつと
親しいやうな氣がしてゐたのに、餘りに時代と隔絶てゐる
と思つた、それよりは眼前の琵琶湖の方が美しかつた。鐘

を撞いてくれと云ふ鐘樓守のお婆さんが面白かつた、鐘を
撞いてやつた、力が弱かつたので、また撞きなほさうとす
ると、お婆さんは一撞一錢だと云つた、幾撞でも好いと撞
きなほした、女は傍で立つてみて居た。

山を降りて宿屋へ歸つた、初秋の氣は涼しくなつてきた、
瀬田の橋が繪の通りに架つて居る、水がゆつくり／＼流れ
て居る、頽廢した宿屋と、幾許か景氣の好い宿屋と、軒を
並べて、夕方はそれ／＼活氣づいた、背中に團扇をさして
白い塵埃に塗れた道者客が幾組も宿屋を覗いて行く、若い
男女の泊つた宿屋には外に餘り客はなかつた。

晩の膳が出た、鰻を焼いたのが皿に入れてある、二人とも一箸も附けなかつた、吸物椀の蓋を取ると鯉の味噌汁であつた、一口眞似ばかり吸つたゞけて蓋をした、お茶碗をあけてみると鰻の白焼が入れてあつた、是も見たとけてあつた、二人とも川魚は大嫌ひであつた、仕様事なしに茄子の淺漬でお茶漬をゴソ〜と食べた、二人は別に失望したやうな顔もしなかつた、給仕を断つた女中は出て來なかつた別の女中が來てお膳を下げて行つた、怪訝な顔をしてゐた。

御飯をしまつても、ちやんと其儘の姿勢で、若い男と、若

い女と對ひ合つた儘、にこりともしなかつた、女中は籠ランプを持つて來た、男は其籠を除けてランプを明るくした、寐轉んで方丈記を読み出した、女は暫くじつとしてゐたが、床の間に置いてあつた手提袋を持出して、其中から桃色のハンケチ、眉刷毛、懷中鏡、旅行用化粧道具など出して、一々叮嚀に始末をした、男は女の化粧道具を珍しさうに見たが、又方丈記を読みつゞけた。

石山寺の秋の夜に折しも月は無かつたけれど、蟲の音は夜の更けるにつけて、呀えて來た、臺所に働く意味の無い女の笑ひ聲が、静かな室に聞えて來た、無口の男女は、其笑

ひ聲にさへ旅の情をしみくと感じた。

不意に廊下の外から「もうお床を取りませうか」と女中が聲を掛た、誰も来たやうな氣色はないのに斯う云はれたので、二人は驚いて、只、ハアと返辭した、女中は直ぐ入つて来て床を取つた、そして「おやすみなさい」と言つて出て行つた。

もう來ないだらうと思つてゐると、暫くして手に行燈を提げて入つて来て「就寝なさる時にランプの方をお消し下さい」と言つた、室を出る時に、障子を締めやうとして態と二人の方を眺めた。

衣箱には友禪の帶や、派手な帶揚や、水色や、紫や、花や、蝶か亂れて掛つた、二人は低い笑ひ聲で何か囁いた、恐らく明日の朝まで、何人にも二人の沈黙を破られないことを欣んだのであらう、室は静になつた。

有明の燈火は自ら消えたか、人が吹消したか、それすら知らぬほど二人は熟睡した、眼を覺ました時には雨戸が皆あいて居て、障子の隙から日影がさして居た、下へ降りて例の嗅い水で顔を洗つた、朝の膳にも川魚が附いて居た、それでも吸物に浮いてゐた一片の蒲鉾があつたから助かつた。

近江八景も、琵琶の湖も、二人の若い心を止めなかつた、今日は此處を去つて、播磨の海岸に行かうと男は思つた、女は何處でもと言つた、男は旅行案内を繰つて、瀛車の時間を調べた、その間に吟附て置いた車が來た。

わざ／＼禮に罷り出た亭主は、幾度も／＼お魚のお詫をし、た、「あれでも精一杯氣を付けました積りてございますが、一向召上りませんで」と氣の毒さうに云ふ、此方が氣の毒になつて「ナニお世話になりました、又來ますよ」と腹一杯の挨拶をした。

番頭も女中も車の傍まで來て送り出した、二挺の車は朝風

に涼しい途を粟津の松原の方へ向つて走り出した、道の兩側の草は露に濡れてゐた。

後に何んな噂をして居やうと、二人の念頭にはそんな事が少しも無かつた、車の走る方へ二人の心は動いて行つた。

水が無い

水が無い、水が無いと云ふ聲は、村から村に響き渡つた。土用前から約四十日の間、一滴の雨も降らぬ、大和は水に騒がしい國だ、畿内平野に水が餘つて、もう雨は要らぬと云ふ時でも、桔槔が忙しい。河はあつても枝流ばかりで、あつるほどの水は、河を挿んだ兩方の村で争ふて引いて了ふ。何んな旱魃にも水の涸れないと云ふ村で共有の不汲井も、遂に村長の指揮の下に開くことゝなつた、平素は滅多に汲

んではならぬとしてある、石の蓋には錠が下りてある。開かれた井の水は、巖の底からでも湧くやうに冷たい、晩に汲めば朝は元の通りになる、朝に汲めば晩には元の通りになる、滾々として盡きない、井戸には番人が附いた。井戸だけではない池にも番人が附いて居る、池の水も大抵は灌き出して、底が見へさうになつてゐる、藻は泥の中で乾いて、枯草のやうになつてゐる、そんな池にすら番人が附く、況して不汲井には番人がつかねばならぬ。方々に起る水論や、小川の水を引く爲の俄の堀割工事や、雨乞やに村の若衆は忙殺されて、なか／＼井戸の番どころ

てはないのだけれど、番をしなければ水を盗まれる。餘儀なく女子供までもかりだされて、番人に命じられる、朝は暗い内から札取りで、汲ませること、極つたが、晝間の番より夜間の番が大變である。

小町と歌はれながら、雨を降らすことの出来ぬ阿園も、此番人の一人であつた。お園は村で評判の娘だが、水の爲に戦争のやうな村人は、女を願ふ願ふもない。お園は夜の三時頃から起きて、よぼ／＼と作爺さんと一しよに井戸の番をした。

水が無い、水が無いと云ふ聲は、ますます／＼高くなるばかり

だ。

今一週間雨が降らなかつたら、大地は龜裂れて、稻の葉は燃えて了ひ、瓜の汁は吸はれて蜂の巢の売のやうになり、草の葉も、木の葉も息の根が止つて了うだらうと云ふ騒ぎ。

無いと云つても帯ほどの水は流れてゐた飛鳥河さへ、上流で堰るものだから、全く砂ばかりになつて了つた、上流へ行くと山に近いから水も段を打つて流れてくる、その川床が露出れて、大きな巖石や、小さな石に支えられた水の淀に、女の子や男の子が魚のやうに泳いで居る、水は其處で

止まつて、下流へは一滴も行かぬ。一時水が出た時には五里の間に三十何箇所か堤の切れたと云ふ飛鳥河も、一帯の砂原に化して、草が生へて居る。

夕方からは方々の山々で雨乞の炬火行列が行はれる、池を廻るの水もある、山へ登るのもある。

爛々たる太陽も光を落して、空は水色に、山は藍色になると、山裾に一點の火が隠顯する、鎮守の火から移した最も神聖な火であらう、一點が二點となり、二點が三點となる、火の數が増加するほど、火は山を縫うて登つて行く、暫くのうちにそれが金糸で綴つたやうに美しくなる、火は或る峠

まで達くと、先の方からそろ／＼山を降り初める、登る火と降る火が遠くから明かに見へる、動くとは見へないのに動いて居る。

お園は其妹や、弟や、母親等と一しよに家の窓から兩乞の火を眺めて居た、只、美しいと思つただけだ。

雨乞の効験があつたものか、翌日の午後四時頃から、山の頂上に怪しい雲が起つた、雲の上に雲が湧いた、見る／＼雲の脚は早くなつた。西の方は晴れて、東だけ曇つて來たのだから、日光は暑さうに射してゐるけれど、村人は一樣に、雨、雨、雨と叫んだ。

一滴の水にも苦勞してゐる村の人達は、大夕立の來さうな空合を見て、手をつかねては居らぬ、手に手に鍬を持った、鋤を持った、杵杓を持った、蓑を出した、笠を下した、スワと言つたら、池、小川、溝の邊り、水の流れる處なら何處へでも駆附けて、少しでも多くの水を自分の田へ引入れやうと用意した。

手ぐすね引いて待つてゐるにも拘はらず、みめぐりの神は容易に雨を落さない、雲が騒いで、確に山の向ふは降つたらうと思はれるのに、此處ばかりは二粒か三粒か、水沫のやうに落ちたかと思ふと、雲は段々山際へ疊まれ、青い空

が廣くなるばかり、えゝつまらないと怨嗟の聲が起ると共に、村の人達は皆落膽したやうであつた。

お園は此騒ぎを茫然として見て居た。

お園は生れたまゝの女であつた、自分は女と云ふことより外に何も知らなかつた、不幸と云ふことも知らない代り、幸福を希ふと云ふことも知らなかつた、お園の一家は皆情の人であつた、圓滿であつた。

お園が生れてから一度も葬儀が出なかつた、婚禮もなかつた、お園は死と云ふことを見ることがない、生の慾を感じたこともない、只人生は斯うしたものだと思つてゐる。

村の若衆の間ではとりくに評判したけれど、お園は何も知らなかつた。

水が無い、水が無いと云ふ聲は、まだ絶えなかつた。

いくら水が無いと叫んでも、水は自然に湧出づるのを待つ

より仕方はないと、お園は人々の叫ぶ理由が分らなかつた、

理由は分らなかつたけれど、井の番に出ることは拒まなかつた、お園は何事も拒み得る女でない。

毎朝、暗いうちから村の人は野に出て水を探した、お園は

星のさら／＼してゐるうちに出て行くのだけれど淋しくは

なかつた。

奔命に疲れた村人は何うなるであらう、水はいつ地上を濕ほすであらう。

海邊の娘

暗い家庭と、廣い都會と、荒んだ人間とに飽き／＼して、旅から旅へ放浪してみたら自由な、壓迫の無い面白い生活が出来来るだらうと信じて、少年詩人の土肥黒潮は東京を抜けた。

土肥は友人を頼つて、海邊の小都會に半月餘り日を送つた。

友人の談話も、海の音も單調であつた、少年詩人は今更輕

卒に都會を去つたことを悔いた、もう都會に歸らうと思つたが、何か變つた面白いことがありさうなものだと、毎日小さな市街を歩き廻つた、そして夕方は毎も海邊に出た。其うちに一つの刺戟が起つた、對象は若い女であつた。友人に誘はれて、町の小料理屋で酒を飲んだ時に、町の藝妓も來たが、藝妓は土肥の子供々々した様子を見て、劈頭から小僧扱ひにした、黒潮は詩や歌にこそ空想の戀を歌つてゐるが、實際の女には初心であつた、初心ながらも女に擲楡ふ氣は充分持つてゐた、何か言つて見たいやうな氣がするのだが、友人のものなれた遊びぶりに吞まれて了つた、

彼は忸怩として居る許りて、藝妓と詩人とは没交渉に終つた。

幸に其家に小娘があつた、一度東京へ出たことがあると云ふので、土肥とも話の端緒が早くついて、二三度行く間に親しくなつた、娘はおゑんさんと言つた、標緻も満更でない處から、自由を欲し、早熟に出来た土肥は忽ち意中の人として了つた。

* * * * *

海の寂寥。

毎日海に来て見ると海は實に淋しい、單調だ、地平線の上

には、例も同じやうな形と、同じやうな色をした雲が在つて、沖には白い小さな波が閃めいてゐる、海邊の砂原に脚を伸して、詩集を讀んだり、茫然考へ込んだりしてゐると、少年の心には自然と云ふものが餘りに淋し過ぎた。

『土肥さん美味しい食物を持つてきましたよ』

後ろにおゑんさんが立つてゐた、友染メリンスの前掛で隠してゐるのは其美味しい物であらう。

『能く濱へ入らつしやるのね、御退屈だらうと思つて、内てこさへた蛤の時雨煮を持つてきました、名物ですよ、喫つて御覽なさいまし』

土肥は何の譯と云ふことなく、嬉しい氣がして感興に乗つてきた。

『ありがたう』

と云つた彼の顔色には感謝の輝きと、おゑんさんを引留めやうとする人懐つこい表情とがあつた。

おゑんも砂の上に踞つた。

『マア此んな所て書物をお讀みになるの、勉強ね』

『勉強でも何でもない、仕様がなからさ、おゑんさん、

面白いことはありませんか』

『斯んな田舎に何の面白いことがございますものか、それ

よりか東京の面白いお話でも聞かして下さいナ』

『東京が嫌で逃げて來たのサ、田舎の方が面白いだらうと思つて』

『あらマア』

おゑんは其が何う云ふ理由か分らなかつた、只お世辭に過ぎないのだらうと思つた。

土肥は短兵急に戀を語りたのだけれど、其折衝に困つた。時を刻んで打つて來る浪に、彼の心は動搖した、それでも強て鎮靜て、對者の胸を探らうと思つた。

『おゑんさんは何れくらゐまで學校へ行きなした』

『私學校は嫌ひだつたもんですから、ほんの小學校だけしか行きません』

『歌といふものを知つてますか』

『知りません、教へて頂戴な』

土肥は詩集の間に挿んであつた——自個の詠草を取出して、おゑんに見せた、おゑんは披げて見て、口の内で讀んでみたが、一向に意味は解らなかつた。詠草には激しい戀の歌が十五六首書いてあつた。

土肥は砂の上に接吻と云ふ字を書いては消し、書いては消した、女には何の字とも讀めなかつた。

『寂しいなア』

と土肥は獨語のやうに言つた。

『そんなに寂しけりや、家へいらつしやいな、いくらでも賑やかに遊べますわ』

『遊んだつて少しも賑やかぢやない、心の内部から寂しいんだ』

『斯んな處で獨て居たら誰だつて寂しいぢやありませんか』

『二人なら寂しくない？』

問ふやうに言つて見たが、おゑんには何の反應もなかつた。

「東京へ連れて行つてあげませうか」

「椰楡つては嫌よ、眞實にしますから」

「眞實にさ」

「あなた、それよりか金銭を持つてゐらつしやるてせう」

「何故」

「私ね、欲くつて欲くつて堪らないものがあるの」

「金なんか持つてやしない」

「嘘、聞きましたよ、確に持つてゐらつしやるつて、ね、

あなた、私の言ふものを買つて下さいな、然う高價はないものだから」

「物によつたら買つてあげても可い、一體幾許くらゐなものなんだ」

「まア三圓までのもの」

「實は僕の懷中に金はない、二三十錢あるだけだ、東京へ歸りたいんだけれど汽車賃が出来なくつて困つてゐる位だから、徒歩で歸らうか知らと思つてゐる、此書物も賣れたら小遣にする積りだ」

「全く然うなの、おや買つて欲くつても駄目ね」

「金なら東京から取寄せられぬこともない、だからちえんさんと二三日一緒に旅行してみたいが、行きませんか」

『だつて金銭を持たない人と一緒に旅行が出来るもんですか、私、内で叱られますわ』

『僕の爲に行きたまへ』

おゑんは返辭をしなかつた、曇つてゐた空が俄に明るくなつた、夕雲の切目から日光が洩れて、海の色は一面に蒼茫なつた。

『どら歸らうかなア』

と、おゑんは起上つて、塵を拂つた、砂がハラ／＼とこぼれた。

『土肥さんもお歸りなさいよ寒くなつてきますから』

『まだ歸らない、暮れるまで此處にゐる、夕方の海ほど好きなものはない』

土肥は詩集を取上げて、明るくなつた光線の下に何かしら心の空虚を充たすやうな芳烈な文字を探した。おゑんは、

『さやうなら』

と言つて、後方も顧盼せずにさく／＼と砂を壊して歸つて行つた、土肥は時雨煮の禮も言はなかつた、砂の上には自作の詠草が落ちてゐた、風に吹かれて海へ行けば面白いがと思つて、其まゝ拾はうとしなかつた、歌反古は風に舞ふて、陸の方へ散つた、土肥は疝癢らしく身を起して、反古

を引摺ひきつかんでまるめた、其手そのてで海うみへ抛なり込こんだ。

旅 寐

自殺じさつでもするのかと疑うたがはれて、宿やどの女中むすめに追跡おとつけられたほど、
深ふかい物思ものおもひに沈しづんで居ゐたのだから、其時そのときの自分じぶんの態度たいどは想さう
像ぞうされる。

都會とくわいに近い磯いその松原まつはら、砂清すなきよく、海静うみしづかに、夏なつの初めはじの宵月よひづき
さす頃ころであつた、自分じぶんが吾家わがうちを飛出とびだして此濱邊このはまべへ來きたのは、
一つは景色けしきの好いいのに人ひとが來こないのと、四五軒けんの料理屋れうりやの
外ほかに家いへと云いふものがなく、何なんとなく人間にんげんを離はなれたやうに思おも

はれるからであつた。

夕方、しづかに松の根方に腰掛けてゐると小さな蟹が無数に、砂の上を這ひ廻つてゐる、松葉がこぼれてゐる、貝殻が落ちてゐる、浪の音が時を刻んで、單調に響いてゐる、松原越しに動かない燈火が見える、何かしら考へる爲に來たのだけれど、何事を考へやうとも思はない。

自分の取つた宿は元來料理屋が主で、人を泊めない筈であるが、餘り流行らない家で、客も日に二組か三組あるだけ、客と云つても多くは晝間に來るので、夜は四五軒の料理屋何れも寂然として、女中の聲が松原の淋しさを破つてゐる

位のもの、それも軒並びでなく、松の枝振や、海の見晴しの都合好い場所を選つて建てたのだから、何の家も離れて居る、斯う淋しくては遊びに來る人の無いのも當然だが、自分には持つて來いの隠れ場所のやうな氣がして、何うか泊めてくれと頼み込んで、四五日は逗留することにした。自分が家出の理由は甚だ複雑してゐる、判断や解決のつく筈はない、功名心もある、戀もある、むしろくしやもある、空想ばかりで頭腦をこしらへてゐる時代だから、周囲の暗い家が嫌になつた、世の中へ出さへすれば美しい自由なものと思つてゐた、然して家を世で何を爲ると云ふ的もな

い、只生活を一變して見たい、舊い習慣ばかりを黒守つて行く吾家の生活が氣に入らぬ、つまらなくて、つまらなくて堪へ切れない、自分には、外に出来ることがあると固く信じて、一も二も家に反抗したくなる。それで出て来たことは出て来たもの、家で想つたやうに世の中は面白く出て来てゐない、女中の輕薄な笑ひ聲や、下等な世間咄を聞く時、侮辱されたやうに感じて、自分を只のお坊つちやんと思つてゐるのかと腹の底で不平が起る、さればと云つて合槌を打つて彼等と共に娛むほどの勇氣もなければ小説の材料にでもする氣で、彼等に椰榆ふほどの好奇心も起らない、

不安は身に纏綿ふてゐる。
氣がつかかなかつた月の光が、はつきりと松の枝を砂に映した、松の幹を幾つもくゞつて、枝折戸を明け、飛石傳ひに椽側へ来た、麻裏を脱ぎすて、自分の座敷へ上ると、行燈を細めに點けて寢床を延べてある、早く寢よと言ふことであらうが、少し物を書いて見たいと思ふのにランプを持つて来ないとは氣が利かぬと、又腹の底で面白くなくなつたが、殊更明るい火を呼ばうとは思はない、暫く夜着の上に座つて考へて居たが、其儘枕に就いた。
浪の音が遠くから、微かに、大きく聞えて来る、引かれて

行くやうに思ふ、容易に眠られない、拍子木の音が響いて来た、段々近づいて来たが、此家の前でハタと止つた、板場ではまだ起きてゐる、拍子木を打つて来た男と、女中とが高い聲で咄をしてゐる、咄の様子では、今日の夕方、怪しい男が二人、此松原に粉れ込んで、何うやら隠れて居るらしいと云ふこと、怪しい男とは盗賊か、人殺か、何でも曲者に相違ない、物騒な晩だから用心して睡眠なさいと、親切らしく言葉を残して男は去つた、拍子木の音は段々遠ざかつて行く。

此家は今、女中ばかりしかゐない、さる有名な料理屋の支

店になつてゐるのだから、能く流行る時には本店の方から男も、女も澤山来るが、今は閑散だからと云ふので、女中が四五人居る許り、云はゞ留守をしてゐるやうなものだ、此淋しい松原に能く女ばかりで居ると思ふ、曲者の用心を注意されたのも至當だ。

夜が少し更けた、浪の音は少しも變らない、女中達も大方は寝たらしい、支店と云つても料理屋のことだから相當に間数がある、何處に寝たか自分には分らぬ、家の内が静寂になつた、女ばかりだと思ふと先刻の怪しい男の咄が氣に掛つて、若し曲者でも忍び込んだら何うしやう、年齢は若

くても自分は男だ、お客様だからと云つて蒲團被つて寝た
真似をしてゐる譯にも行くまい、飛んだ家へ泊り込んだも
のだ、早く夜が明けてくれると可い、自分の身の上のこと
より、刻下の不安に又眼が冴えて来る、浪の音は頻りに睡
眠を誘ふ、時計は十一時を打つた。

うつら／＼としたかと思ふと、ひそ／＼と話聲が聞える、
宵の咄を思ひ出してぎよツとした、併し話聲は存外平穩だ、
まだ女中が眠らなかつたのかと思ふたら然うでない、話は
椽側の端だ、女の聲と、男の聲で、女は殊に内を憚つてゐ
る様子、男の聲はそんなに低くもない、女は頻になだめて

ゐる、男は初め不平らしかつたか何か納得したらしい、「お
客だつて男じゃないか、何うして泊たのだい」何うしてつ
て、頼まれたからさ」「何だか分るもんじやない、四五日居
るつて言ふのだね」「さう、もうお歸りよ、ね、遅いから」
「歸る、歸るよ、ほんとに馬鹿にしてやがらあ、冗談じや
ねえ」「何を言つてるのだらう、此人は、今夜だけじやない
か」「よし分つた、まあ歸るとしやう、それで店の方は何う
なつたのだい」呼びに来たつて急に歸りやしないから大丈夫
夫よ」「さうか、まア巧くやつときねえ」話はひそ／＼聲だ
けれど、夜が更けて、周囲が静寂だから能く聞取れる、男

は椽の外に居るらしい、雨戸を一枚開けて話してゐるらしい、女の方は聲で分つた、女中の中の一番年長な、圖抜けて大きい女だ、骨格も逞しく、身丈も高く、今日物を言はれて自分は返答におづくした愛嬌と云つて別にないやうだが、世熟れた態度、外の女中は皆此の女に憚つてゐるやうに見えた。

男も去つた、女も寝た、夜は更に開けて燈火の影が暗い、浪の音、また浪の音。

昨夜は自分の家で寐た、今夜は此處で寐る、僅に一晚のことして、斯うも世の中が違ふものか知ら、自分の考へやうと

思つたことは考へられずに、いろ／＼の刺戟を受ける、世間は飛出す處ではない、意味も何もなくされて了ふ、一晩ですら此通りだ、つまらなくても吾家の方が、未だ何か知ら考へたり想ふたりする餘裕がある、安心がある、實際彼の浪の響の上に乗つて居るやうな心持がして沈靜かない、夜が明けたら一つ考へを變更て見ねばならぬ。然う思つても亦、吾家よりは自由な、放縦な、開放された天地があるやうな氣がして、恐ろしい夢も見ずに、すやすやと浪の音の裡に眼つて了つた。

明治四十三年五月六日印刷
明治四十三年五月十日發行

定價金五拾五錢

霧
製複許不

著者 河井 醉茗

發行者 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地
四村 寅次郎

印刷者 東京市神田區松下町八番地
橫田 五十吉

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

發行所 東雲堂書店

電話本局一六三九番
振替東京五六一四番

橫田活版所印刷

出版圖書目錄

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

東雲堂書店

◎青年の實力を示すべき好個の短篇集◎

田山先生花選

木山下田茂實 畫

二十二篇

再版發賣

四六判美本
紙數 三百頁
定價 五十五錢
送費 六錢

執筆者

皆川越橋上松水加
行人水草菱良胡仙掬
穗岐山小浪川浪夕水
尾知山靜波西村菱小徑
秦菱歌田中落穗

本書は過去四年間に文章世界紙上に現はれたる青年作家の作品より、更に田山先生選抜して、その最も優れたるもの二十二篇を收む。本書に收められたるものゝことは、皆現文壇の諸作に比するも毫も遜色を見ざるもの。敢て文藝を談ずる青年諸氏の一讀を推奨す。

岩野泡鳴新作 (近刊)

長篇
小説

放浪

定價 郵未

定價 稅

「神秘的半獸主義」「新自然主義」の著者として夙に日本の論壇に異彩を放ちつゝある泡鳴氏の最初の長篇小説也。著者昨冬北海樺太の天地に放浪するや、其耳目に觸れし北海特殊の風物と複雑せる世相人生とは、歸來其全力を傾倒して執筆せる新作『放浪』に最も鮮明なる色を以て描き出されたり。本書の出版は以て寥々たる創作界の震撼するに足るものあるべし。

石井柏亭装幀・歌數一千首

歌集

別

離

菊半截總クロス
天者金宵像入本
定價金七拾五錢
送費金八錢

若山牧水著

△「別離」は著者の先に著したる「海の聲」「獨り歌へる」を併せ、加ふるにその後の新作全部を以てす。

△最も深く眼覺めたる歡喜の歌、苦悶の歌、悲哀の歌、寂寥の歌はこの小さき一卷に満ちたり。

△同じくうら若き人々の机下に献ず。

中村星湖著 高村光太郎装幀(新刊發賣)

小説 星湖集

四六判四百頁
佛蘭西式裝釘
定價金六拾五錢
送費金八錢

著者は青年作家中絶えず摯實なる態度をもつて創作をつづけ、尤も未來を囑せらるゝ一人也。その諸作は目して多く傑作とせられ、常に評論壇を賑せたりき。今その近什十四篇を輯めて本書成る。收むるところ、一切の事、白晝、朝鮮へ朝鮮から、つゝ音、石を持つた女、村の「西郷」、木像の批評、行路病者、嬌笑、つなぎ糸、敵地、畑、犬ころ、粉負ひ、以上。

島村抱月氏序 仲田勝之助氏序
馬場取名 蝶川春装氏序
馬場取名 蝶川春装氏序

ツルゲネフ 散文詩

四六判二百頁・定價三十五錢・送費四錢

ツルゲネフ散文詩は彼が思想の精華にして、彼が心的縮圖也。その文體の精練、觀察の深奥銳利なる他にその比を見ず、まことに世界文壇の花なり。本書には彼が最も得意なる散文詩の作五十篇をあつめ、更に彼が長逝數ヶ月前に書ける有名なる「門口」一篇を加ふ。また小引として譯者の解説を附し、以て彼が文體を學ばんとするもの、便に供す。譯は忠實精緻、坊間に行はるゝこの書のごときものと少しくその撰を異にせり。

|| これ實に歌壇の黎明なり、新曙光也 ||

十月會歌集

黎

明

歌數五百首
定價四十錢
郵稅四錢

本書は下記諸氏の最も得意なる歌各數十首を收む。

水野葉舟 高瀬俊郎 植松壽樹 綱野新二郎 川崎左右 加藤藤一 松村英一

半田良平 田中完治 岡田道一 石井貞子 山下要 宗耕一 窪田空穂

露國 クロポトキン著

日本 佐藤綠葉譯

一露西亞文學史一

—(近刊)—

